

聖徒の道

4
1996



末日聖徒
イエス・キリスト
教会

聖徒の道

1996年4月号



表紙——オランダ・ハーグステークに集う末日聖徒の青少年は、セミナーに出席し、互いに助け合うことが、証を得てそれを保ついちばん大切な点であることを知った。裏表紙（上）ジャネット・クレイバーク（15歳）。（下）デニス・カット（13歳）（「オランダに咲く花」本誌p.34参照。写真撮影／ブライアン・K・ケリー、マービン・K・ガードナー）。

こどものページ——イエスは「よい羊飼」と呼ばれています。ちょうど羊飼いが群れのことを知り、心にかけているように、イエスもわたしたち一人一人を知り、気づかってくくださるからです。イエスはほかにもいろいろなすばらしい名前でも知られています。あなたもどれかの名前を知っていますか。5ページを開けて、「主の呼び名」を読んでみましょう。（「よい羊飼」デル・パーソン画）

一般

大管長会メッセージ——聖霊の賜物、正しい羅針盤	
第二副管長ジェームズ・E・ファウスト	2
生ける預言者の言葉 ゴードン・B・ヒンクレー	10
復活 ロバート・J・マシューズ	12
神の面影を受ける	20
ヘンリー・B・アイリング長老	
「決定的影響」を受けながら歩んだ道 ジェラルド・N・ランド	26
賛美歌がもたらした希望 アネッテ・P・ボーエン	44
地には平和を ロバート・E・ウエルズ	46

青少年

モルモンメッセージ 新しい命——主の賜物	9
この場所を忘れないように クリスタル・トーマス	24
オランダに咲く花	
マービン・K・ガードナー、ブライアン・K・ケリー	34
奉仕の機会を見つける タマラ・リーザム・ベイリー	40
木彫りのナイフ エイミー・ジョー・ジャクソン	42

定期特別記事

読者からの便り	1
家庭訪問メッセージ——日ごとの食物	25

こども

モルモン書物語——ニーファイ、大きな力をさずかる	2
たんけん——主の呼び名 ドロシー・レオン	5
ちいさなみんなのために——イースターのものがたり	8
小さなお友だちへ——J・バラード・ウォッシュバーン長老	10
分かち合いの時間——よく考え、いのり、耳をかたむける	
カレン・アシュトン	12
おばあちゃんの花壇 アルマ・J・イエーツ作	14

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊—イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊—インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊—チェコ語、ブルガリア語、ハンガリー語、アイスランド語、ロシア語。

大管長会：ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン、ジェームズ・E・ファウスト
十二使徒定員会：ボイド・K・バックナー、L・トム・ベリー、デビッド・B・ヘイト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット、ロバート・D・ヘイルズ、ジェフリー・R・ホランド、ヘンリー・B・アイリング

編集長：ジャック・H・ゴースリン
顧問：スペンサー・J・コンディー、L・ライオネル・ケンドリック
教科課程管理部責任者
実務部長：ロナルド・L・ナイトン
企画・編集ディレクター：ブライアン・K・ケリー
グラフィックスディレクター：アラン・R・ロイボーグ

国際機関誌スタッフ
編集主幹：マービン・K・ガードナー
編集主幹補佐：R・バル・ジョンソン
編集副主幹：デビッド・ミッチェル
編集補佐/こどものページ：ディエン・ウォーカー
工程管理：メアリー・マーティンデル
出版補佐：ベス・デーリー

デザインスタッフ
機関誌グラフィックスディレクター：M・M・カワサキ
アートディレクター：スコット・バン・カンペン
デザイナー：シェリー・クック
制作主幹：ジェーン・アン・ピーターズ
制作：レジナルド・J・クリステンセン、デニス・カービー、マシュー・H・マックスウェル

予約購読スタッフ
ディレクター：ケイ・W・ブリッグ
配送部長：クリス・クリステンセン
マーケティング部長：ジョイス・ハンセン
聖徒の道1996年4月号第40巻第4号
発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
〒106東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-3440-2351

印刷所 株式会社 リック/クロスロード
定価 年間予約/海外予約2,400円(送料共)
半年予約1,200円(送料共)
普通号/大会号200円

Copyright © 1996 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—1994年8月 翻訳承認—1994年8月 原題—International Magazines April, 1996. Japanese. 96984300

●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/00100-6-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。
●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課 ☎03-3440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター ☎044-811-0417

The Seito No Michi (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150. Subscription price \$14.00 a year. \$1.50 per single copy. Thirty days notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150. U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to Seito No Michi at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

家族の目標

家族ともども『リアホナ』(スペイン語版)が与えられていることに感謝しています。そこには、一人一人のためになる記事が満載されているからです。『リアホナ』のおかげで、毎日、福音に対する知識を深め証を強めることができます。

「毎日」と言ったのは、1日に一つずつ記事を読むという目標を立てているからです。夫が仕事から帰って来ると、家族で集まって祈ります。まず、各自が仕事を終え、そろって記事を読むことに感謝します。次に、その日に選んだ記事の内容がよく理解できるよう天父に祈り求めます。この活動に加わって、熱心に『リアホナ』を読もうと努力する子供たちの姿が見られることにも非常に感謝しています。

カリフォルニア、ヘメットステーキ
ラモーナワード
スザーナ・メンドーサ

真の解決策

我が家では家族全員で『デア・シュテルン』(ドイツ語版。「星」の意)を読んでいます。また将来参照できるように毎号を保存しています。この機関誌は、様々な問題の真の解決策を与えてくれます。

また「こどものページ」を読むのも楽しみです。娘は毎号大事にしています。

スイス、チューリッヒステーキ
ビンテルトゥールワード
ルース・ジャイスラー

靈感の源

10年前にバプテスマを受けて以来、ずっと『リアホナ』(英語版)を読んできました。

この機関誌を通じて世界の様々な国

の聖徒たちについて読むごとに、わたしの証は強まり霊が鼓舞されています。それらの会員たちと日々の活動を共にしているように感じることもさえます。

フィリピン、カトバロガン地方部
カトバロガン第1支部
アルバロ・R・タディア

必要なときの助け手

1975年にバプテスマを受けてから、貴い神の御心を伝える『リアホナ』(スペイン語版)を予約購読しています。悲しいときや苦しいときにこの機関誌を読むと、励まされます。また、子供たちを諭し、彼らが救い主に近くあるよう育てる努力をするときにも、『リアホナ』から時宜にかなった必要な助けをししばしば得ています。

チリ、ピアアレマナステーキ
リマチエワード
クラウディオ・ナバレッテ・G

偉大な影響

この最良の機関誌から、毎月得られる貴重な教えに感謝します。これらの記事はきっと多くの末日聖徒の生活に偉大な影響を与えていることでしょう。わたしにとっても、確かに有益な書物です。

特に今年は、各記事を読む度に、様々な国の聖徒たちの福音に対する愛が伝わってきて、セミナー教師としての責任を果たすうえで力づけられました。教師がその神聖な責任を通じて、熱心にシオンの青少年を訓練している記事にも感動しました。青少年の記事は、わたしの生徒たちにとって偉大な模範となっています。

エクアドル、クエンカ地方部
アソケス支部
エストリア・デ・ラ・ヌーベ・バルサイオ



たまもの
聖霊の賜物、
正しい羅針盤

第二副管長

ジェームズ・E・ファウスト

北 半球では春を迎え、自然界がいきいきと活動を始めています。草木は青々と茂り始め、新芽がふくらみ、果物の木のつるも伸びています。子羊が生まれ、花が咲き始めています。そして、間もなくわたしたちはイースターの季節を迎え、すべてのキリスト教徒とともに、救い主が死の墓から復活されたことを祝います。

助け主
.....

何世紀も前に、救い主が愛する弟子たちをあのゲツセマネの園へ最後に連れて入られたときの出来事は、ほんとうに感動的です。イエスは、御自身を待ち受けている厳しい試練を御存じで、苦悶くもんして言われました。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、目をさましていなさい。」(マルコ14:34) 主は、筆紙に尽くし難い苦しみを覚悟しておられました。

11人の使徒たちは、不吉なことが起こると感じていたことでしょう。しかし、理解することはできませんでした。イエスは以前に、使徒たちのもとを離れることについて話されました。ですから使徒たちは、心から愛し頼っている主が



たまもの
聖霊の賜物は、
……バプテスマの後、
権能を持つ人の
あかし
授けられます。
……聖霊の賜物を持つ人は、
さらに大きな光と
証を受けることができます。



PHOTOGRAPH BY STEVE BUNDERSON

どこかへ行かれることは知っていましたが、それがど
なのかは分かりませんでした。イエスはこのように話し
ておられました。「わたしはあなたがたを捨てて孤児と
はしない。……しかし、助け主、すなわち、父がわたし
の名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべ
てのことを教え、またわたしが話しておいたことを、こ
ごとく思い起させるであろう。」(ヨハネ14:18,26)

わたしがお話ししたいのは、この「助け主」につい
てです。今日ほどわたしたちの生活の中に天からの導きを
必要とする時代はないと思われるからです。また、ぜひ
証あかししたいことがあります。わたしたちは聖霊の力と賜物たまもの
によって、人生に幸福と平安をもたらすために行うべきこ
とと、行ってはならないことを識別できるということです。

神の御霊

十二使徒定員会のリグランド・リチャーズ長老は次の
ように述べています。「聖霊は、神とその御子イエス・
キリストがこの世の人々に導きを下さるときの仲立ちと
なる働きを持っていらっしゃる。」(『奇しきみわざ』
p.103)すべての人は神の御霊によって、すなわち良心
とも呼ばれるキリストの光によって教えや導きを受けて

聖霊の慰めみたまの御霊は、働くときも、遊ぶときも、休むと
きも、1日24時間わたしたちとともにあります。そして
日々、わたしたちを強めてくれます。

います。ヨブはこう言いました。「しかし人のうちには
霊があり、全能者の息が人に悟りを与える。」(ヨブ32:
8)これが神から与えられる御霊です。この神の力は、
ジョセフ・F・スミス大管長が述べているように、人を
啓発する力です。「この御霊によってすべての人は啓発
される。善人も悪人も、知者も愚者も、身分の高い者も
低い者も、それぞれ光を受ける能力に応じて啓発され
る。」(『福音の教義』p.60。教義と聖約88:13も参照)

聖霊の賜物

しかし聖霊の賜物は、神の御霊と違って、すべての人
には与えられません。聖霊の賜物を授かっていない場合、
受けられる聖霊の導きに限りがあります。預言者ジョセ
フ・スミスは、「聖霊と聖霊の賜物には違いがある」と述
べています(『Teachings of the Prophet Joseph Smith
『預言者ジョセフ・スミスの教え』p.199)。教会員では

ない多くの人も、聖霊から啓示を受けて、福音が真理であることを確信してきました。コルネリオはまだバプテスマを受ける前に、五旬節の日集った多くの人と同じように、聖霊を受けました（使徒2：1—12；10：30—44参照）。真理を求め人が『モルモン書』や福音の原則に対する証を得るのは、この力によるのです。

聖霊の賜物は、悔い改めてふさわしくなった人に与えられるもので、バプテスマの後、権能を持つ人の接手によって授けられます。ペテロは五旬節の日、すでに聖霊の力を心に感じている人々に次のように言いました。「悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい。そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けるであろう。」（使徒2：38）聖霊の賜物を持つ人は、さらに大きな光と証を受けることができます。聖霊は真理について証し、父なる神と御子イエス・キリストが実在することを人の心に深く刻みつけます。そこでもはや、世のいかなる力や権威もその知識を取り去ることができなくなります（2ニーファイ31：18参照）。

確かな羅針盤

『モルモン書』、『聖書』、そのほかの聖文は、現代の預言者の導きとともに、正しい行動基準を示しています。さらに聖霊の賜物は、確かな導きや良心の声、羅針盤、すなわち正しい選択をするための指針となってくれます。この羅針盤は一人一人が受ける個人的なもので、間違っても、動かなくなることもありません。しかし、わたしたちは自信を失い、不幸な生活に陥らないために、その導きによく注意して聞き従わなければなりません。

わたしたちが確かな羅針盤を必要とするのは、わたしたちの霊性や名誉、高潔さ、価値、品位を守る助けになる標準、価値観、聖約、責務などの多くが徐々にむしろ、忘れ去られつつあるからです。様々な価値観の中

でもとりわけ強調したいのは、純潔の標準、両親への尊敬、結婚生活における貞節、安息日を守るなどの神の律法の遵守です。これらは完全に失われていないまでも、かなり弱められています。社会は誤った道を進んでいるのです。

徐々に容認されていく害悪

トーマス・R・ローワンは、テレビ番組の標準が低下していることについて、次のように述べています。「作家で評論家のマルコム・マガリッジ氏が次のような話をしました。生きたかえるが何の抵抗もせずゆでられてしまった話です。なぜ無抵抗だったのでしょうか。なべに入れられたときは、ぬるま湯だったからです。ところが、水温はほんの少しずつ上がっていきました。少しずつ、少しずつ、温かくなっていきました。変化があまりに緩やかだったので、かえるはほとんど気づかずに、上がっていく温度に順応していきました。そこでつい手遅れになったのです。マガリッジ氏の言わんとすることはかえるではなく、わたしたちについてです。わたしたちには、突然ショックを与えるようなものでないかぎり、悪を受け入れてしまう傾向があります。そして、すでに容認している悪よりもほんの少しであれば、道徳的に低いものでも受け入れてしまいがちなのです。」（*National Press Club Forum* 『ナショナル・プレスクラブ・フォーラム』）

このような緩やかな過程について、古代の預言者が預言しています。ニーファイは、人々の心が悪魔に惑わされる様子を次のように記しています。「悪魔は人の子らの心の中で荒れ狂い、人の子らをそそのかして善いことに対して怒らせる。また、悪魔はほかの人々をなだめ、彼らを欺いて現世での安全を確信させるので、彼らは、『シオンの中では、すべてが良い。まことに、シオンは栄えており、すべてが良い』と言う。悪魔はこのようにして人々をだまし、巧みに地獄に誘い落とすのであ

る。」(2ニーファイ28:20-21)

悪魔が人々を注意深く地獄へ連れて行くそのやり方は、感心してしまうくらい巧みです。

アレキサンダー・ポープは、悪を受け入れることについて、同じような考えを表しています。

「悪魔はものすごい形相の怪物だから、憎むにはその顔を見ればよいわけだが、あまり見なれて親しみが湧き、最初のがまんが隣れみに、やがて抱擁するようになる。」

(上田勤訳『世界名詩集大成』平凡社、p.162)

聖霊はわたしたちを強めてくださる

わたしたちは誘惑に遭うとき、聖霊の賜物の力によって、律法を思い起こし、誘惑を退けられるように促されます。B・H・ロバーツは次のように述べています。

「誘惑に遭うとき聖霊の導きを受ける人は、……この福音の律法に……従って行動できるでしょう。」(The Gospel: An Exposition of Its First Principles and Man's Relationship to Deity 『福音——その第一の原則の解説および人と神との関係』pp.191-192)

若人の皆さん、すべての人が受けられるこの特別な聖霊の賜物に注意を払ってください。この助け主は神会の一員で、霊の御方です。『教義と聖約』には、聖霊がなぜ霊の御方なのか説明されています。「御父は人間の体と同じように触れることのできる骨肉の体を持っておられる。御子も同様である。しかし、聖霊は骨肉の体を持たず、霊の御方であられる。もしそうでなければ、聖霊はわたしたちの内にとどまり得ない。」(教義と聖約130:22)

聖霊の賜物は、ふさわしい状態にあってそれを望む人に「聖霊の力、または聖霊の真理の光」を受ける権利を授けるものです(『福音の教義』p.59)。

聖霊の慰めの御霊は、働くときも、遊ぶときも、休む

ときも、1日24時間わたしたちとともにあります。日々わたしたちとともにあって励まし、喜びのときも悲しみのときも、常にわたしたちを支え、助けてくれるのです。

助け主がもたらす平安

わたしは、この不安定な世にあって、聖霊の御霊こそほかの何よりも、わたしたちに心の平安を与えてくれるものだと思っています。それは、いかなる薬品やこの世の物質よりもわたしたちの心を開き、幸福感を増し、肉体的にも精神的にも安らぎを与えてくれます。この慰め主は、向上しようとする人に啓示を与えたり、危険が迫っていることを警告したり、失敗しないように助けたりして下さいます。また、御霊はわたしたちの生まれつき持っている感覚を磨いてくださるので、わたしたちはもっとはっきり見、もっとはっきり聞き取り、忘れてならないことをよく記憶することができるようになります。つまり、聖霊の導きに従うならば、わたしたちは至上の幸福を得ることができるのです。

聖霊は、恐れや不安を克服できるように助けて下さいます。例えば、赦すことを教えてください。傷つけられたことや不公平な扱いを受けたことを思い出して悩むよりも、もっと大きなものを求めて前進しなければならぬときがあります。過去の傷にいつまでもとらわれていると、自然に御霊が失われ、平安を得ることができないのです。

確かな証し人

また、聖霊は信仰の危機を乗り越えられるように助けて下さいます。聖霊の御霊は確かな証し人となって、天につける事柄について証します。人は、御霊を通して確信を持つようになると、疑問が消え去ります。

使徒パウロはこのような述べています。「神の国は飲食ではなく、義と、平和と、聖霊における喜びとであ



この世から永遠にわたる結婚の聖約が、約束の聖き御霊によって結び固められると、文字どおり天の窓が開かれ、祝福を求める夫婦に大いなる恵みが注がれます。

る。」(ローマ14:17) さらに別のところで、真の聖徒は「聖霊の宮」であると述べています(1コリント6:19)。

聖霊の結び固めの力

ここで、約束の聖き御霊について一言話したいと思います。これは聖霊の結び固めと裁可の力です。約束の聖き御霊によって聖約や儀式が結び固められると、祝福を求める人が忠実であるならば、それに伴う祝福を受けることが約束されます(教義と聖約76:50-54参照)。

例えば、福音の最高の儀式であるこの世から永遠にわたる結婚の聖約が、約束の聖き御霊によって結び固められると、文字どおり天の窓が開かれ、祝福を求める夫婦に大いなる恵みが注がれます。そのような結婚生活は実り豊かで、安定した、聖いものになります。夫婦は、それぞれ独立した一個の人間でありながら、聖約によって結ばれ、絡み合っ

うになるのです。そして、自分のことを考える前に伴侶のことを考えるようになります。

約束の聖き御霊を通して与えられる大いなる祝福の一つは、福音の儀式と祝福を通して受けるあらゆる聖約、誓言、誓詞、履行などが、約束の聖き御霊によって確認されるだけでなく、結び固められることです。しかし、この結び固めは、わたしたちが正しい生活をしなければ解消されます。また忘れてならない大切なことは、もし人が偽って結び固めの祝福を受けようとしても、「たとえ権威を持った立派な人から受けても、その祝福は結び固められない」ということです(『救いの教義』2:89)。

聖約や儀式が約束の聖き御霊によって結び固められると、その約束は地においても天においても結ばれます。

「わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない」

祈りがこたえられ、助けを求める人の生活に奇跡が起こったのを耳にするのは、いつもうれしいものです。しかし、高潔で忠実な人々が奇跡を受けず、望むような方法で祈りの答えを得られないのはなぜでしょうか。彼らはどのようにして、またどこから慰めを得たらよいのでしょうか。世の救い主はこう言われました。「わたしは

あなたがたを捨てて孤児とはしない。あなたがたのところに帰って来る。……しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は……。」(ヨハネ 14:18, 26)

簡単に言えば、聖霊の賜物は強い霊的な力であり、それを受ける資格のある人は神の力をさらに深く知り、享受できるようになります。

..... ジョセフからブリガム・ヤングへの勧告

1847年2月に、ブリガム・ヤングはすばらしい経験をしました。預言者ジョセフが夢か示現の中に現れたのです。彼は預言者ジョセフと再びまみえることを願い、さらに、教会の兄弟たちに伝えるべき事柄はないか尋ねました。すると、預言者ジョセフはこう語りました。

「人々にこう言ってください。謙遜で忠実であるように、また必ず主の御霊に従うように。そうすれば正しい道へと導かれることでしょう。注意を怠らず、静かなさやきに耳を傾けてください。そうすれば何をすべきか、どこへ行くべきかを学び、主の王国の実を収穫できるでしょう。兄弟たちにこう言ってください。いつも心を開いて理に服し、聖霊の訪れを受けたなら、いつでもその教えに従うようにと。」

さらに預言者は、ブリガム・ヤングに次のように指示しました。「主の御霊をそのほかの霊と区別することができます。主の御霊は、心に平安と喜びをもたらし、悪意や憎しみ、争いや邪悪をすべて心から取り去ってくれます。そして、人は心の底から善をなし、正義を行い、神の王国を築きたいと願うようになるのです。」(エルデン・J・ワトソン編、*Manuscript History of Brigham Young* 『ブリガム・ヤング稿本人物史』p.529)

..... 聖霊を常に伴^{はんりよ}侶とする

わたしたちはシモン・ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、マリ

ヤ、マルタ、そのほかの人々のように、救い主の前で生活することはできませんが、聖霊の賜物をわたしたちの助け主、確かな羅針盤にすることができます。

わたしたちは聖霊の導きの下で霊的に成熟するにつれ、自分が価値ある存在で、人から認められていることをいっそうよく理解できるようになります。このことを証いたします。さらにわたしは、聖霊の御霊との交わりを、ほかのいかなる交わりよりも大切にするようすべての人にお勧めいたします。なぜなら、御霊は、神のもとへ帰るのに必要な光と真理、純粋な英知へと人を導いてくれるからです。

主の次の約束がわたしたち一人一人に成就するよう願っています。「聖霊は常に〔わたしたちの〕伴侶となり、〔わたしたちの〕笏は義と真理の不変の笏となるであろう。そして、〔わたしたちの〕主権は永遠の主権となり、それは強いられることなく、とこしえにいつまでも、〔わたしたちに〕流れ込むことであろう。」(教義と聖約121:46) □

..... ホームティーチャーへの提案

1. わたしたちが確かな羅針盤を必要とするのは、社会の品位を守る助けになる標準や価値観の多くが忘れ去られつつあるからである。

2. この確かな羅針盤とは、聖霊の力と賜物である。

3. 聖霊の賜物を通してわたしたちは、幸福と平安を得るために何をし、何をすべきでないかを知ることができる。また、誘惑を退けるよう促しを受けたり、危険が迫っていることを警告されたり、わたしたちの生まれつき持っている感覚を磨かれたり、恐れや不安を克服して信仰の危機を乗り越えられるよう助けられたりする。

4. わたしたちは聖霊の導きの下で霊的に成熟するにつれ、自分が価値ある存在で、人から認められていることをいっそうよく理解できるようになる。

モルモンメッセージ

新しい命 主の賜物



主イエス・キリストは霊的な再生と
肉体の復活をもたらされます。
主を通してわたしたちは清められ、
完全な者となれるのです
(ヨハネ11：25参照)。

PHOTOGRAPH BY JED CLARK

生ける預言者の言葉

ゴードン・B・ヒンクレー大管長の教えと勧告

最大の奇跡

「兄弟姉妹の皆さん、わたしは生涯にわたって様々な奇跡を目にしてきました。その中でも最大の奇跡は、回復されたイエス・キリストの福音を受け入れ、その教えを自分の生活の中に取り入れようと努めている人々の人生にもたらされる大きな変化ではないでしょうか。わたしは回復されたイエス・キリストの福音の不思議な力に心から感謝しています。これは実に、驚くべき業と不思議であり、全能の神の力がその息子娘たちのために働きかけて初めて、起こり得たことなのです。」¹

救い主を深く知る

「教会の若人の生活に、もっと霊的なものを提供してあげてください。……すべての〔若人〕の心に、主との関係を強めたいという気持ちを芽生えさせてください。そのためには、若人が贖い主の贖いの原則を少しでも知り、それによって世の救い主を深く知るようになる必要があります。贖いを通じて、わたしたち一人一人に永遠の命がもたらされるようになったのです。」²

ふさわしさと正しさ

「わたしが心配していることのひとつは、教会員の中に、神殿推薦状を所持するだけの努力を十分にしていない人々がまだ存在するという点です。神殿推薦状は、それを所持する人々のふさわしさとその望みの正しさの象徴となります。……

安息日は、子供たちにきちんとした服装をするよう教える良い機会です。またこの日には、聖文を読むことも非常に大切です。……

ポルノグラフィを遠ざけてください。恐ろしい病気を避けるように、遠ざけてください。これは死に至る病であり、習慣性があります。一度取りつかれて、その支配下に入ってしまうと、そこから逃げ出すのは容易なことではありません。……このたぐいの雑誌やビデオ、深夜番組は……皆さんには必要ありません。皆さんを傷つけるだけであり、何の助けにもなりません。そういうものを見続けていると、それによって滅ぼされてしまうで

しょう。」³

青少年に与える勧告

「皆さんは大いなる若人です。これまでわたしが度々言ってきたとおり、わたしたちの教会は今、教会の歴史上、最もすばらしい若人に恵まれています。わたしはそう考えています。皆さんは福音をよく知っています。セミナーに出席し、そこで主に関することを学んでいるからです。わたしの世代が皆さんと同じ年齢のころと比べたら、皆さんの福音に関する知識の方がはるかに優れていることは、疑いを差し挟む余地もありません。わたしはそう確信しています。……

自分が30代、40代になってどんな生活をしているかは、皆さんが10代のときにどんなことを行うかによって決まるのです。」⁴

結婚後

「結婚したら、お互いにこれ以上はできないと思えるほど誠実であってください。利己心は、幸福な家族生活を破壊する大きな要因になります。伴侶の慰めと安らぎと幸福を第一に考え、その気高い目標のために自分自身の欲求や関心を抑えることができたなら、皆さんは幸福になり、その結婚は永遠にわたって続いていくでしょう。」⁵

母親の役割

「ますます多くの女性が仕事のために毎日家を空ける時代になってきています。折にふれ、立ち止まって以下のことを考え直してみるのは何とすばらしいことでしょうか。つまり、女性がなし得る最大の働きは、義と真理のうちに子供たちを養い、教え、高め、励まし、育てることであるという事実です。現在どんな仕事に就いていようとも、この働きに匹敵する業はほかにありません。

わたしは、教会の女性たちが最大の責任をないがしろにして、より小さな責任に固執することのないよう望んでいます。教会の母親の皆さんに、また今日ここに集っている母親の皆さん一人一人に申し上げます。年齢を重ねるにつれ、皆さんは、子供たちが正しく、善良に、高



潔に、そして信仰をもって生涯を送っていけるよう立派に育て上げたことに対して、いよいよ感謝の念を深めていくことになるでしょう。……

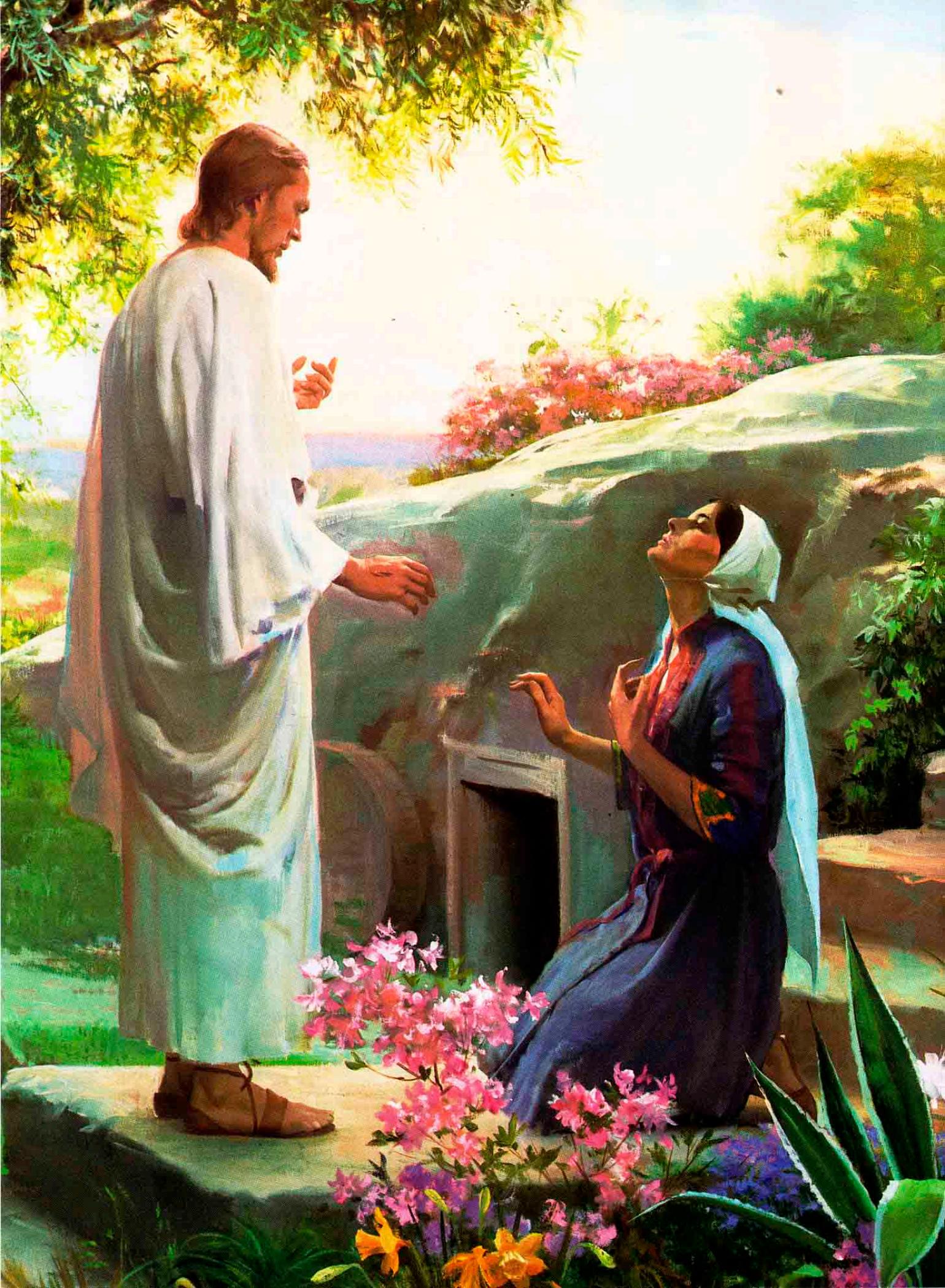
皆さんにはわたしの気持ちが分かっていたいただけるものと思います。この前の総大会でタバナクルに座って、教会員から支持の挙手を頂いていたとき、わたしの目の前に、いわば心の目に、わたしがまだ幼いころの母の姿が浮かんできました。当時わたしはなかなか扱いにくい子供でしたので、母はきっと、わたしが将来、期待にこたえてくれるような人物になろうとは夢にも思っていなかったことでしょう。わたしは今老境に入って、母にこうして敬意を表する機会が与えられていることに心から感謝しています。……

この教会の歴史を通じて、信仰を伝え、教えるという偉大な役割を果たしてきたのは母親たちでした。わたしは心からそう確信しています。』⁶□

注

1. 1995年5月21日、カリフォルニア州バカビル・サンタローザ合同地区大会
2. 1995年5月13日、ユタ州ヒーバーシティー・スプリングビル合同地区大会、神権指導者会
3. 同上
4. 1995年4月30日、ユタ州ソルトレーク・シティー、スカイライン高校セミナリーファイヤサイド
5. 1995年4月27日、ユタ州プロボ、ブリガム・ヤング大学学位授与式
6. 1995年5月14日、ユタ州ヒーバーシティー・スプリングビル合同地区大会





復活

死に対する主の勝利は、
この世と永遠にわたる幸福を求めるあらゆる人々にとって不可欠なものであった。

ロバート・J・マシューズ

愛する人の葬儀に参列したことのある人ならだれもが、アダムの墮落によって全人類にもたらされた死の重みを感じたことでしょう。そしてそのようなときにこそ、亡くなったすべての人が不滅の肉体をもって死者の中からよみがえるという教義の重要性に気づくのです。よみがえった人々はその体を永久に持ち続け、もはや老いることも、痛みや病、死にさらされることもありません。

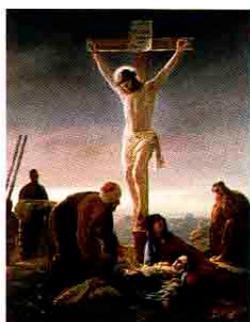
死人の中からの復活の教義は、イエス・キリストのメッセージの中心を成すものです。したがって、復活について聖文にどうあるか、また中央幹部はどう述べているかを理解することは、信仰をはぐくんでいくうえで欠かせません。

預言者ジョセフ・スミスはこう語っています。「死者の復活と永遠の裁きに関する教義は、イエス・キリストの福音の第一の原則の中でも必ず説かなければならないものである。」(Teachings of the Prophet Joseph Smith 『預言者ジョセフ・スミスの教え』 p.149)

『旧約聖書』で説かれている復活

死人の中からの復活の教義は『旧約聖書』では顕著ではありません。しかし、旧約の預言者たちはこの教義を知っており、簡明に教えています。

例えばヨブが希望を捨てなかったのは、彼のぼろぼろになった肉体が再生され、その肉体で神を見ることを知っていたからです。ヨブは、贖い主あがなが生きておられるので、自分は死後も生き続けると理解していました(ヨブ19:2, 5-27参照)。



エゼキエル書第37章には、枯れた骨の谷に関する示現が出ています。そこには「骨と骨が集まって相つらな」とあります(7節)。そして一度亡くなった人々が生き返り、立ち上がるのです。そこで主はエゼキエルに、イスラエルの家に対してこう言うように命じられます。「わが民よ、見よ、わたしはあなたがたの墓を開き、あなたがたを墓からとりあげ〔る〕…わたしがわが霊を、あなたがたのうちに置いて、あなたがたを生か〔す。〕」(エゼキエル37:12, 14)

『旧約聖書』のこれらの聖句は、全人類が復活を遂げることを信じる人々にとっては復活の教義を示すものとして明解なものです。それは恐らく、彼らに末日の啓示の祝福と聖霊の賜物があるからでしょう。この知識の源を持たない他教派の友人たちの中には、これらの教えを単なる比喩たとえまたはぐう話としてしか解釈していない人々がいます。彼らはイエスが肉体の復活を遂げたかどうか不確かで、中には今でも当時の肉体をもち続けていると考えている人々がいます。

『新約聖書』で説かれている復活

救い主の弟子たちでさえ、復活について初めて知ったときはなかなか信じられませんでした。救い主が以前からそのことについて話し、それは「よみがえりであり、命である」主御自身について語ったものであると宣言されたにもかかわらず、そうなのです(ヨハネ11:25)。ルカは、石が墓から転がされて、イエスの遺体がなくなっていたのを見た女たちについて、「途方にくれて」と表現しています(ルカ24:4)。彼女たちは二人の天

THE BURIAL OF CHRIST, BY CARL HEINRICH BLOCH



JOHN AND PETER AT THE TOMB, BY ROBERT T. BARRETT



PHOTOGRAPH BY DON THORPE

イエスの使徒たちもイエスが死人の中からよみがえったという現実をなかなか理解できなかったが、次第にイエスが復活された御方であることを知るようになる。空になった墓は今日、主が生きておられることを雄弁に物語っている。

使から、イエスが死人の中からよみがえられたと告げられます。この女たちは「十一弟子や、その他みんなの人」のもとに急いで駆けつけ、事の次第を話します。しかし、「使徒たちには、それが愚かな話のように思われて、それを信じなかった」のです(11節)。

同じ日の遅くに、イエスは使徒たちに御姿を現されました。彼らはイエスが次のように言われるまで、霊を見ているのだと思いました。「わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしなのだ。さわって見なさい。霊には肉や骨はないが、あなたがたが見るとおり、わたしにはあるのだ。」(ルカ24:39) 彼らはイエスを見、イエスに触れ、イエスの声を聞きました。「彼らは喜びのあまり、まだ信じられないで不思議に思っていると、イエスが『ここに何か食物があるか』と言われ」ました(41節)。彼らが魚と蜂蜜を差し上げると、イエスは皆の前で食べられました。しかし、死人の中からの復活はまさに奇跡であり、この世の中では不自然なことだったので、使徒たちにとって自分の見聞きしたことを信じるのはとても困難でした。

しかしながら、イエス・キリストが骨肉の体を持つ復

活した御方であることは、彼らにとって疑いを差し挟む余地のないことでした。ペテロはイエスの復活を、使徒行伝や彼の書簡の中で力強く宣言しています(使徒1:22; 2:32; 3:15; 4:33; 5:30-32; 1ペテロ1:3; 3:21参照)。そして、ペテロとヨハネがあまりにも大胆にこの教義を教えたので、祭司たちやサドカイ人たちは「近寄ってきて、彼らが人々に教を説き、イエス自身に起った死人の復活を宣伝しているのに気をいら立て」ました(使徒4:1-2)。

復活を説いた人でパウロの右に出る人はいません。彼は多くの書簡の中でそのことを述べました。コリント人への第一の手紙第15章にある復活についての傑出した説明は、『聖書』の中の復活についての記述としては最も長く詳細にわたるものとなっています。

『モルモン書』で説かれている復活

わたしたちはイエスの死と復活について『新約聖書』から読み取ることができます。しかし、イエスの死と復活がなぜ重要であり、わたしや皆さんと個人的にどうかかわってくるのかを知りたければ、わたしたちは『モルモン書』をひもとかなければなりません。

『モルモン書』の目的と使命はイエス・キリストを証することです。そしてキリストを証する書物となるためには、『モルモン書』は復活の教義を教えていなければなりません。5,000年前、主はエノクに『モルモン書』の出現とその目的を明らかにされました。「また、わた

しは天から義を下そう。また、地から真理を出して、わたしの独り子と、死者の中からの独り子の復活と、またすべての人の復活について証しよう。」(モーセ7:62)

復活の教義については『モルモン書』の中のおもだった預言者のすべてが教えています。「復活」という言葉は『モルモン書』に83回登場し、「墓からよみがえる」や「死人の中からよみがえる」などの言葉は少なくとも26回登場します。

リーハイとヤコブの教え

預言者リーハイはこう語っています。「したがって、これらのことを地に住む者に知らせ、聖なるメシヤの功德と憐れみと恵みによらなければ、だれも神の御前に住める者がいないことに気づかせるのは、何と大切なことであろうか。聖なるメシヤは、肉において御自分の命を一度捨て、そして、死者の復活をもたらすために御霊の力によって再びそれを得て、最初によみがえる者となられる。」(2ニーファイ2:8)

わたしたちはこれらの聖句から、イエスが最初に復活を遂げられた御方であることが分かります。聖文にはイエスの復活以前に生き返った人々の例が出てきますが、それらは単に死すべき肉体が蘇生されたにすぎません。不滅の肉体を得て死人の中からよみがえったのは、イエスが最初です。このことは『新約聖書』から確認することができます(マタイ27:52-53;使徒26:23;1コリント15:22-23;コロサイ1:18;黙示1:5参照)。

ニーファイ第二書第9章で福音の教義の偉大な教師であるヤコブは、復活の必要性を次のように詳しく述べています。

「死がすべての人に及ぶようになったので、大いなる創造主の憐れみに満ちた計画を成就するためには、復活の力が必ずなければならぬ。その復活は、墮落のゆえに必ず人に及ばなければならぬ。墮落は背きのゆえに生じたのである。そして、人は墮落したために主の御前から絶たれてしまった。

したがって、贖罪は無限の贖罪でなければならない。もしそれが無限の贖罪でなければ、この朽ちるものが朽

ちないものを着ることはできない。したがって、人にとって最初の裁きが限りなく続かなければならぬ。もしそうならば、この肉体は横たえられ、朽ち果てて母なる大地に返り、もう二度と起き上がることがないに違いない。

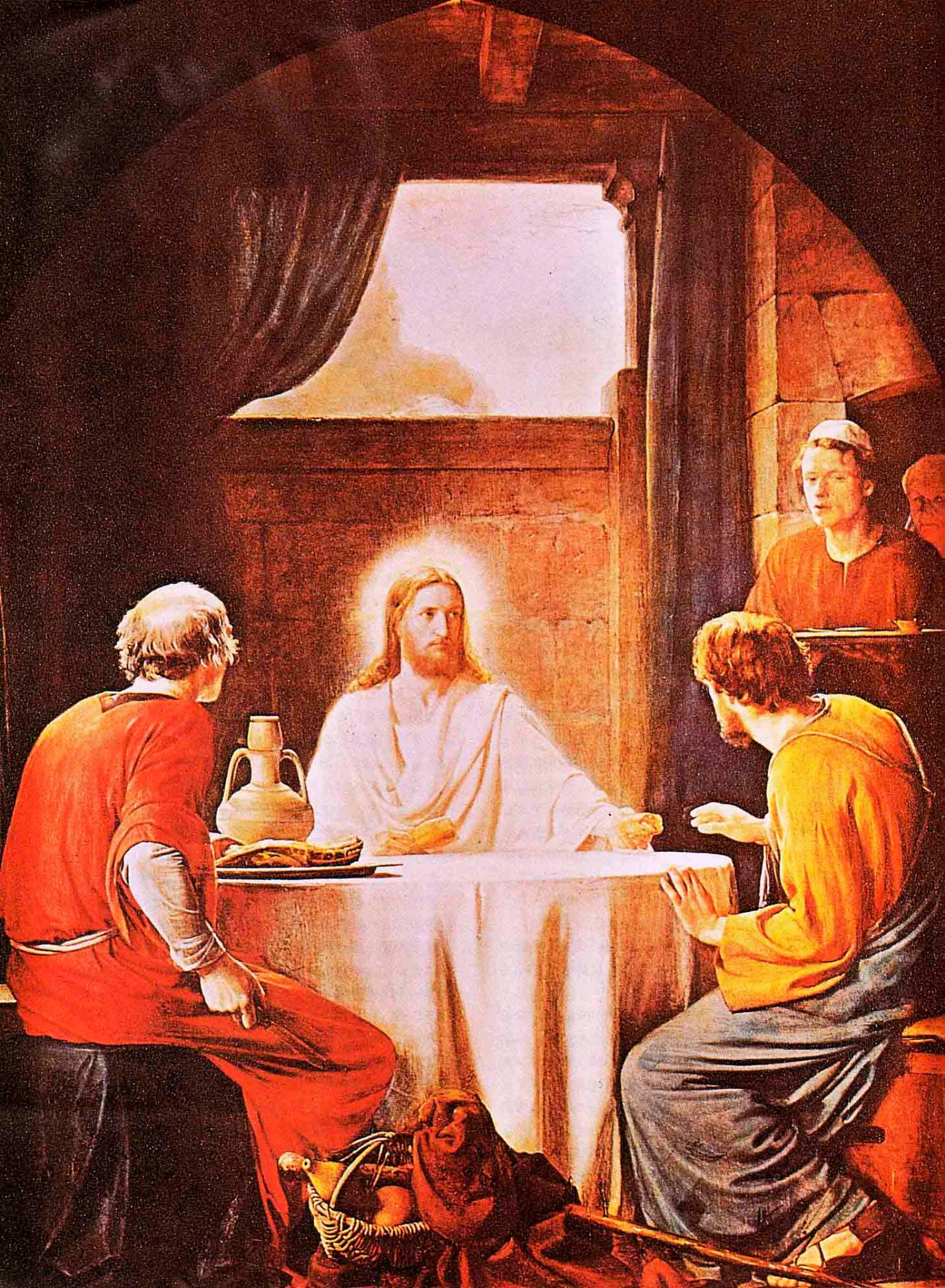
おお、神の知恵、神の憐れみと恵みよ。見よ、もしも肉体がもう二度と起き上がることがないとすれば、わたしたちの霊は、永遠の神の御前から落ちて悪魔となったあの天使に従うようになり、もはや起き上がることはない。

そして、わたしたちの霊は、あの天使のようになっていたに違いない。わたしたちは悪魔の使いである悪霊となって、神の御前から締め出され、偽りの父とともに、彼自身のように惨めな状態にとどまっていたに違いない。まことに、その者はわたしたちの始祖をだました者であり、光の天使であるかのように装い、人の子らをそそのかして人殺しをする秘密結社を作らせたり、あらゆる隠れた闇の業を行わせたりする者である。」(6-9節)

アダムの墮落は全人類に、肉体の死だけでなく霊の死をももたらしました。霊の死とは神から絶たれることです。こうして人は、自分だけの力では神のもとに帰れなくなりました。イエスの贖罪と復活は、全人類をこの両方の死から贖い、わたしたちを裁きのために神のもとに戻してくれるものなのです。

ヤコブは続けています。「また、わたしが語ってきたこの死、すなわち霊の死もやがてその死を解き放す。その霊の死とは地獄のことである。したがって、死と地獄とはその死を解き放さなければならぬ。すなわち、地獄はそこに囚われている霊を解き放し、墓はそこに囚われている肉体を解き放して、人々の肉体と霊は互いに回復される。それはイスラエルの聖者の復活の力によるのである。

おお、わたしたちの神の計画の何と偉大なことよ。今語ったことのほかに、神のパラダイスは義人の霊を解き放し、墓は義人の体を解き放さなければならぬ。そして、その霊と体は再び本来のものに回復され、すべての人は不朽となり、不死となる。彼らは生けるものである。」(12-13節)



アビナダイの証^{あかし}

預言者アビナダイは、死者の復活をもたらすメシヤがこの世を創造されたエホバにほかならないことを指摘しています。「世界が始まって以来、預言を述べてきたすべての預言者たちも……神御自身が人の子らの中に降^{くだ}って来て、人の形を取り……死者の復活をもたらされることと、神御自身が虐げられ、苦しめられることも、……述べてこなかったであろうか。」(モーサヤ13:33-35)

アビナダイはさらにこう教えています。「さて、将来起こることをすでに起こったことのように話すと、もしもキリストがこの世に来られなかったならば、贖^{あがな}いは決してあり得なかった。

また、墓が勝利を得ないように、そして死がとげを持たないように、もしキリストが死者の中からよみがえられなかったならば、すなわち死の縄目を断たれなかったならば、復活はあり得なかった。

しかしながら、復活は実際にあるので、墓は勝利を得ず、死のとげはキリストにのみ込まれてしまう。……

この死すべき体は不死をまとい、この朽ちるものは朽ちないものをまとして、……。」(モーサヤ16:6-8, 10)

復活について語るアミュレク

アミュレクは復活についてのわたしたちの理解に、新しく重要なポイントを幾つか付け加えてくれています。神の御子について、アミュレクはこう述べています。「神の御子は……御自分の御名^{みな}を信じる人々の背きを負われる。これらの人々は永遠の命を得る人々であり、これ以外の人々に救いは与えられない。

したがって、悪人はあたかも贖^{あがな}いがなかったかのような有^{ありさま}様であり、ただ死の縄目からの解放だけがある。見

救い主は復活体が骨肉の体であることを、復活の後に二人の弟子たちと「一緒に食卓につかれ」ることによって示された。また、イエスの体は復活前よりも大きな力を秘めたものであった(ルカ24:13-32参照)。

よ、すべての人が死者の中からよみがえって神の御前^{みまえ}に立ち、自分の行いに応じて裁かれる日が来るからである。

さて、肉体の死と呼ばれる死がある。そして、キリストの死は将来この肉体の死の縄目を解き、すべての人がこの肉体の死からよみがえる。

霊と体は再び結合して完全な形になり、……神の御前に連れ出されて立ち、自分のすべての罪をはっきりと思ひ出す。

さて、この復活は、老いた人にも若い人にも、束縛された人にも自由な人にも、男にも女にも、悪人にも義人にも、すべての人に与えられる。そして、……行いに応じて裁かれるために、一つの永遠の神である御子なるキリストと御父なる神と聖なる御霊^{たま}との法廷に連れ出され、罪の有無を問われる。

……わたしはあなたに言う。この死すべき体は不死不滅の体によみがえる。死から、すなわち第一の死から命に移り、すべての人がもう死ぬことはあり得ない。彼らの霊は体と結合して、決して分離しない。このように相合したものは、霊的な、不死不滅のものとなり、彼らもはや朽ちることがない。」(アルマ11:40-45, 下線付加)

アミュレクが述べたことでわたしたちが特に注目するのは、霊と肉体がもう分かれることはないという教えです。復活した人はもう死ぬことはできません。そして、生まれ変わることもできません。すると時々、次のような疑問がわいてきます。イエスはほかのもろもろの世界の救い主でもあられたのでしょうか。答えは「はい」です。イエスはほかの世界でも苦痛に遭い、死に、復活されたのでしょうか。答えは「いいえ」でなければなりません。この出来事がもしほかのどこかで起こったのであれば、この世で起こることは不可能です。復活した人は、この聖句が教えるように、霊と肉体が分かれることがないからです。したがって、イエスがわたしたちの世界とは別の世界でもっと前に復活を遂げておられたのであれば、この世に誕生されることはなかったはずですし、十字架におかかりになった後に再び復活を遂げられることもなかったはずです。滅びの子は復活するのでしょうか。復活します。彼らはもう一度肉体の死を味わいますか。

今読んだ聖句からすれば「いいえ」です。彼らは神の前から絶たれます。つまり「霊の死」を味わいますが、わたしたちの知るかぎり、肉体の死を味わうことはありません。

アルマの証^{あかし}

アルマは復活の教義を息子に次のように教えました。「見よ、すべての人が将来、死者の中から出て来る定められた時がある。……

さて、人が死者の中から出て来るのは一度だけか、それとも二度か、三度か、それは重要ではない。神はこれらのことをすべて御存じだからである。」(アルマ40：4-5)

アルマは「復活」という言葉を次のように理解していると述べました。「霊は体に回復され……手足と関節はことごとくその体に回復される。まことに、髪の毛一筋さえも失われることなく、すべてのものが本来の完全な造りに回復される。」(23節)

アルマは墮落と贖罪と復活の関係を次のように説明しています。「全人類は墮落した状態になり、正義の支配下に入った。まことに、……全人類がとこしえに神の御前から絶たれることになったのである。

さて、憐れみの計画は、贖罪が行われなければ成し遂げることができなかった。したがって、神は憐れみの計画を成し遂げるため、正義の要求を満たすため、また御自分が完全で公正な神、憐れみ深い神であり続けるために、御自分で世の罪の贖いをされるのである。

憐れみは贖罪によって与えられるのである。そして、贖罪は死者の復活をもたらす、死者の復活は人を神の御前に連れ戻す。このようにして、人は神の御前に連れ戻され、律法と正義により、自分の行いに応じて裁かれる。」(アルマ42：14-15, 23)

証人たちの言葉

第三ニーファイ第11章には復活された救い主がバウンティフルの地を訪れられた様子が描かれています。救い

主はそこで群衆に御自分の体をお見せになり、御自分の体が実体のある体であることを手で触れて確かめるように言われました。ニーファイはこう告げています。「天から一人の男の方が降^{くだ}って来られるのが見えた。この御方は……降^{くだ}って来て群衆の中に立たれた。

そこでこの御方は、片手を差し伸べて人々に言われた。「見よ、わたしはイエス・キリストであり、世に来ると預言者たちが証した者である。」

彼らは、キリストが天に昇られた後、自分たちに御自身を現されることが預言されていたのを思い出した……。

そこで、主は彼らに言われた。

『立ってわたしのもとに来て、あなたがたの手をわたしのわきに差し入れ、またわたしの両手と両足の釘の跡に触れて、わたしがイスラエルの神であり、全地の神であること、そして世の罪のために殺されたことを知りなさい。』

そこで群衆は進み出て、主のわきに手を差し入れ、また主の両手と両足の釘の跡に触れた。彼らは……自分の目で見、自分の手で触れ、この御方が、将来来られると預言者たちによって書き記された主であられることを、確かに知って証した。

彼らは……一斉に叫んだ。

『ホサナ。いと高き神の御名がほめたたえられますように。』そして、彼らはイエスの足もとに伏して、イエスを拝した。」(3ニーファイ11：8-17)

イエス・キリストがイスラエルの神であり、全人類をアダムの墮落から贖い、墓からよみがえって全人類の肉体の復活をもたらす、すべての人を裁きのために神のもとに戻された御方であるとの荘大な宣言は、『モルモン書』の中に明白に述べられています。この宣言は、『モルモン書』が語る偉大なメッセージなのです。

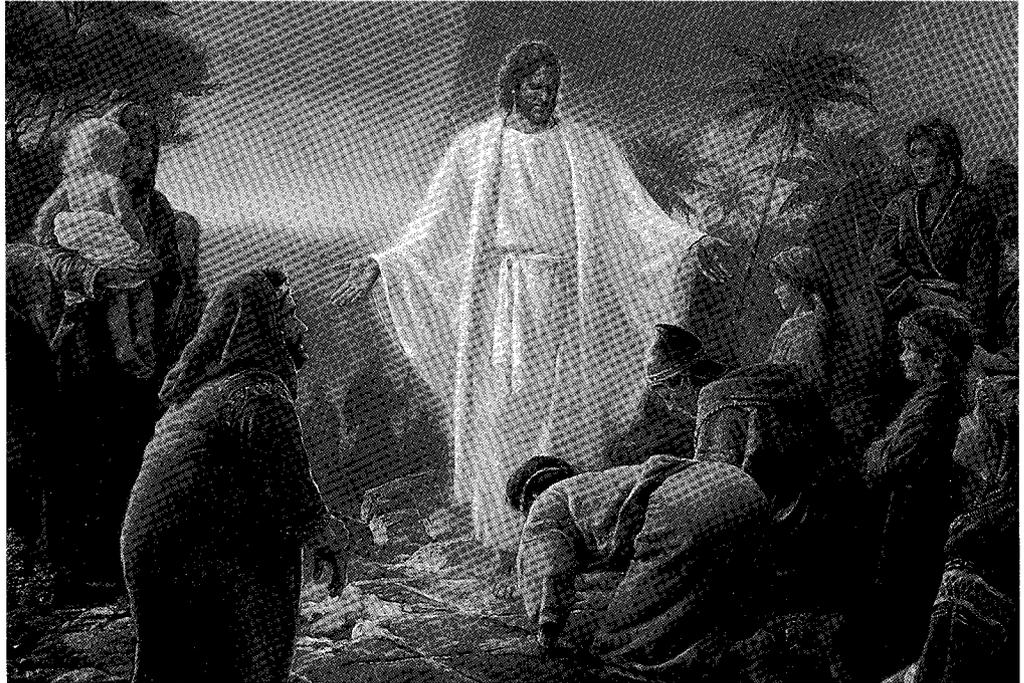
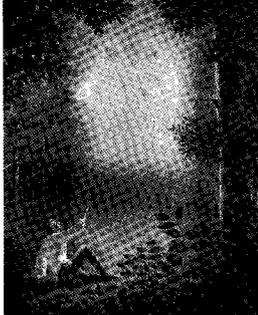
近代の啓示

同じ教義は、さらに洗練され明確な形となって、『教義と聖約』や『高価な真珠』、さらには預言者ジョセフ・スミスやこの神権時代のほかの預言者の教えの中に見られます。

CHRIST APPEARING IN THE WESTERN HEMISPHERE,
BY ARNOLD FRIBERG



THE FIRST VISION, BY TED HENNINGER



THE BIBLE AND THE BOOK OF MORMON TESTIFY OF JESUS CHRIST, BY GREG OLSEN

コリント人への第一の手紙第15章の復活に関する心を揺さぶる説教の中で、パウロは次のような問題提起をしています。「どんなふうにして、死人がよみがえるのか。どんなからだをして来るのか。」(35節)パウロがこの問いかけを用いたのは、栄光の3つの階級についての説明の中においてでした(37-44節)。最初の問いはブリガム・ヤング大管長 (*Journal of Discourses* 『説教集』 6:275; 15:137-139参照)とエラスタス・スノー長老(同上, 25:34)が具体的に答えています。つまり、復活も王国におけるほかの多くの事柄と同じように、権能を持つ人々の手により、また委任を受けた人々によって行われるのです。人は自分で自分にバプテスマを施すことはできませんし、自分がバプテスマを受けて聖任され、権能を授かるまでは、人にバプテスマを施すことはできません。同様に復活も自分の力ではできません。権能を持つ人の呼びかけを受けなければ不可能なのです。人は復活した後この権能を授かります。そしてほかの人々を復活させられるようになるのです。

ほかの末日の啓示には、復活体は満ちみちる喜びを得るうえで不可欠のものであることが述べられています(教義と聖約93:33-34参照)。また教義と聖約第45章17節と第138章50節から、死後の霊界にいる霊たちは肉体と霊が長い間分離した状態にあることを一種の束縛と考えていることが分かります。預言者ジョセフ・スミスの説明はこうです。「わたしたちがこの地上に来たのは、肉体を得て、それを日の栄えにおいて神の前に清い状態

古代アメリカ大陸に住んだ人々は主の復活の第二の証人となった。復活の直後、主は義にかなったニーファイ人に教えと導きを授けられた。また1820年に主は御父とともにニューヨーク州パルマイラの森で預言者ジョセフ・スミスに御姿を現された。

で示すためである。偉大な幸福の原則には、この肉体を得るといことが含まれる。悪魔は肉体を持たない。そこに悪魔への罰がある。」(『預言者ジョセフ・スミスの教え』p.181)ジョセフは別の折にこう語っています。「だれも幕屋〔肉体〕を通してでなければ救いは得られない。」(同上, p.297)

さらにわたしたちは近代の啓示から、復活が人類にとどまることなく、あらゆる生物に及ぶということを知っています(教義と聖約29:23-25参照)。

以上が近代の預言者や使徒から学ぶことのできる復活についての洞察の一部です。これらの洞察は、古代の聖文に記された教えや過去の神権時代に啓示された教えと相まって、それらを理解するわたしたちに希望と勇気を与えてくれます。

アダムの時代から現代まで、イエス・キリストと福音について教えられるときはいつも、復活の教義も教えられてきました。死者の復活は栄光と奇跡を伴う現実の出来事なのです。□



神の面影を受ける

わたしの生活は空虚で、自分自身を価値のない人間だと考えていました。
そんなときに、ジュリーが手を差し伸べ、
救い主を見いだせるように助けてくれたのです。

匿名

わたしは末日聖徒の両親のもとに生まれ、8歳でバプテスマを受けました。教会の集会やセミナーにははじめに出席し、生活の一部として常に福音があったものの、ほんとうの意味では改宗していませんでした。セミナーで学んでいたころは聖文を勉強する良い習慣が身に付いて、それが数年間はとても自分の役に立ちました。しかし、どうしても真剣に祈るところま

では行けませんでした。青少年の時代のわたしにはたくさんの過ちがあり、祈りがとてもつらく難しいものに感じられました。

わたしはそのような生活から逃げるような気持ちで大学に行きましたが、21歳のときに、父が思いも寄らない事故で亡くなってしまいました。わたしは悲しみの中で、聖文を読むことをやめてしまいました。

それから何年かしてわたしは神殿で結婚し、夫が法学部で苦学している間に3人の子供をもうけました。当時のわたしは聖文の勉強や心からの祈りを満足にしていなかったため、試練や挫折に遭うとき、悪の力に対してまったく無防備の状態でした。心の中は怒りと挫折感でずさみ切っていました。

やがて夫が卒業し、わたしは彼の就職に合わせてよその州に引っ越しました。それまでの長い間にも、アメリカの様々な所に住んだ経験がありましたが、今回の新しい環境については、まったく場違いという印象しかありませんでした。新しいワードはかなり裕福な人の多い地域にありました。わたしたちには学費に充てた借入金はかなりあり、家財といえるようなものはほとんどありませんでした。車は時代遅れ、衣服も流行遅れのもので、家具は中古で互いに不釣り合いなものばかりでした。この周囲との際立った格差はわたしにとってつらいものでした。

決してほかの人々の持ち物を見てうらやんだわけではありませんが、こんな貧しい生活をしていては、周囲の人々からまともな人間として見てもらえないのではないかと、という気持ちが強かったのです。

何か月かが過ぎましたが、そのワードではどうしても友人を作ることができませんでした。学生時代にいたワードでは結構ゆったりとした気分でした。このワードでは心に重圧を感じ、自分を大切にしてくれた友人や家族から遠く隔てられてしまったという思いでした。

そこでの長い長い1年半が過ぎるころには、わたしの感情は10代のころよりも、もっと不安定になっていました。自分は人々に受け入れられていないという気持ちが高じ、周囲とうまくやっっていこうという意志さえなくなってしまいました。

そんな状態のときに同じワードのジュリーという姉妹がわたしに手を差し伸べてくれるようになりました。彼女はわたしが心ひそかに尊敬していた姉妹でした。わたしより10歳年上で信仰が強くだれからも尊敬されている人でした。わたしと親しくなりたいという彼女の心の内を聞いて、信じられない気がしました。それでも、孤独な生活をしてきたわたしは、彼女の誘いを受けて、彼女や彼女の友達と一緒に毎朝近くのコースをジョギングすることになりました。

ジュリーは毎日朝の祈りと聖文の勉強をしてからやって来ました。彼女の心の中にはいつも福音や聖文に対する熱い思い、また聖文を読むことによって得られる見識があふれていました。彼女と一緒にジョギングは、セミ



ジュリーとのジョギングは、セミナーのクラスや霊的な集会に出ているのと同じようなものでした。彼女の内の中にはいつも福音や聖文に対する熱い思い、また聖文を読むことによって得られる見識があふれていました。

ナリーのクラスや霊的な集会に出ているのと同じようなものでした。ジュリーはわたしに心からの関心を示し、悩みや不安に思っていることを決して裁くことなく、耳を傾けてくれました。

ジュリーの熱意はこの上なくすばらしいものでした。わたしは彼女の模範に倣い、定例のプログラムに出席し、7年ぶりに熱心に聖文を勉強するようになりました。

わたしは自分自身の生活の中で毎日のように御霊を感じるようになり、ピーハイブアドバイザーの召しを果たしていく中で、自分も御霊に従っていけるのだということを理解しました。そしてもう一つ分かったのは、以前のわたしはプログラムや集会に出席していても、霊的には眠った状態で長い年月を過ごしていたということでした。

ある日、わたしは少し遅れて教会に行きました。いつものようにジュリーが音楽の指揮をしていました。彼女の顔を見ると、すてきな笑顔で、何か光で満たされたように輝いていました。その目はまっすぐわたしに向けられていました。わたしの心の中は安らぎと喜びと込み上げてくる熱い思いでいっぱいになりました。それはわたしにとって驚きでした。御霊を強く感じているのだということは分かりましたが、そのときの思いが何を意味するのかまでは理解できませんでした。

その大きな喜びと安らぎの感情をずっと胸に秘めながら、わたしは日曜学校と聖餐会の間中、いろいろと思

巡らしていました。そして、聖餐会せいさんかいの最後のときになって、その証あかしの意味が分かったのです。御霊みたまに満たされたジュリーは、聖餐会に集った人々に、輝いた表情を通して、救い主の愛を伝えようと積極的に努めていたのです(アルマ5:14, 19参照)。

そのとき、わたしの心にささやきかける一つの声がありました。「あなたもあのようにならなければなりません。」それはわたしの人生を変える言葉でした。わたしは驚きました。自分自身の生き方についての考え方が突然に変わってしまったのです。わたしもジュリーのように、笑顔を絶やさぬように、また彼女が示してくれたと同じ愛と優しさを人々に伝えなければならぬと思ったのです。そして、もしわたしの表情にキリストの愛が表れているなら、自分が何を着、どんな車に乗り、どんな家に住んでいるかなど気にする人はだれもいない、と初めて気づきました。

それ以来わたしの人生は大きく変わりました。翌月、わたしはホームメイキングの集會に足を運びました。それは以前はまったくなじめないでいた集會でした。わたしはまるで初めて出席したような気持ちで、その場に集った姉妹たちの顔を見渡しました。そこにいた姉妹たちが皆、自分の友達か、あるいは友達を必要としている人のように思えました。だれの顔にも、恩着せがましきや非難を感じませんでした。また、彼女たちに何かを求めようとは思いませんでした。むしろ、自分は何を与えられるだろうかという思いで皆を見ていたのです。

その後、物事に積極的に取り組む姿勢と希望を持つという点から見れば、成長してこられたと思います。生活の中で御霊を感じれば感じるほど、主から望まれるすべてのことを行う力と信仰を持ちたいと強く望むようになりました。

同じころ、あるファイヤサイドに出席しました。そのファイヤサイドではジュリーが祈りについて数多くのことを話しました。わたしは彼女の勧告を受け入れ、朝晩心からの祈りをささげ始めました。以前よりも早く起き、祈りのために15分から20分の時間を取るようにし、その時間は自分の人生にとって最も大切な御方とお会いするときだと考えるようにしました。そうすると、以前にはなかった方法で答えや導きが得られるようになりました。

わたしは贖いについて徹底的に勉強し始めました。そして、心を改めること、また靈的に生まれ変わることについての教を学びました。学んでいくにつれ、救い主とその贖いの力、またあらゆる失敗、弱点から自分を救ってくれる贖いの効力に対する敬虔な思いを深めていきました。

救い主に対する敬虔けいけんな思いを深めていくにつれ、自分自身を大切な人間だと思えるようになりました。子供たちはわたしがよく笑顔をみせるようになった理由を聞いてきましたし、夫も前のように言い争うことがなくなった理由を尋ねてきました。

ある日わたしはモーサヤ書第5章7節から8節の聖句を読みました。「あなたがたはキリストの子と……呼ばれる。……あなたがたは、キリストの御名みなを信じて心が改まったと言う。だから、あなたがたはキリストから生まれ、キリストの息子および娘となったのである。

そしてあなたがたは、この称号の下で自由を得た。このほかにはあなたがたに自由を得させる称号はない。」

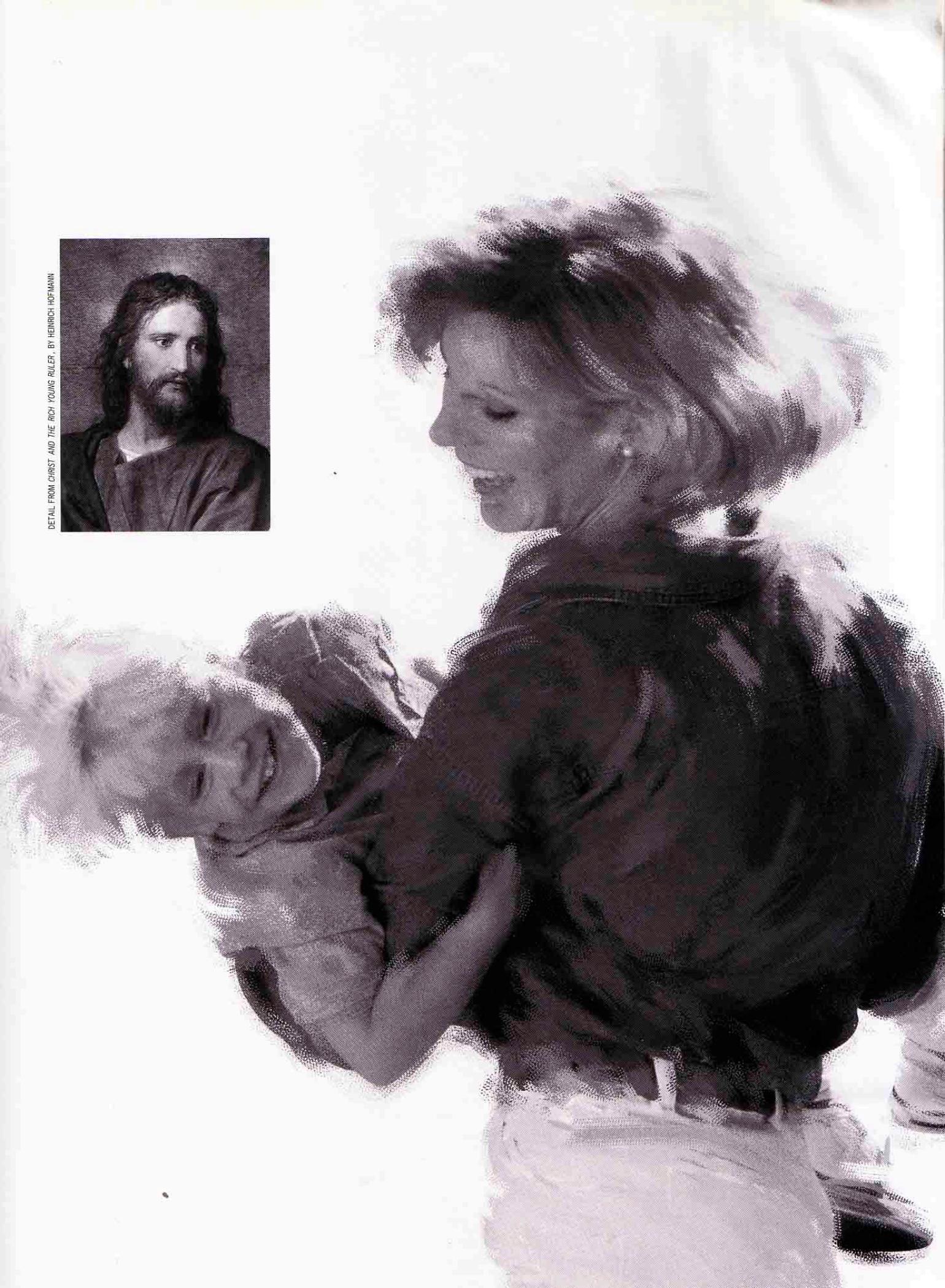
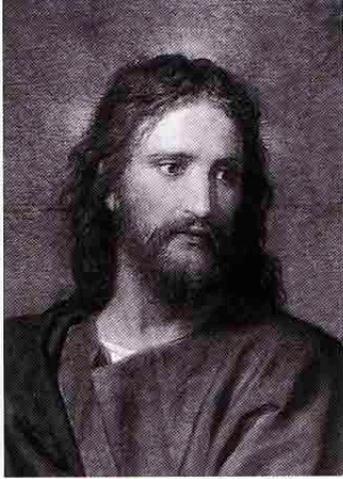
このとき初めて、「自由を得る」という言葉の意味が理解できました。わたしは、恐れ、無力感、後ろ向きな感情から次第に解放される状態にあったのです。自分の手足からまさしく手かせや足かせが外されていくように感じました。自分自身を大切な人間だと思えるようになると、生きる姿勢が変わってきました。子供たちはわたしがよく笑顔をみせるようになった理由を聞いてきましたし、夫も前のように言い争うことがなくなった理由を尋ねてきました。わたしの母や兄弟たちも「一体何があったの」と不思議でならない様子でした。

わたしたちは、初めはとても居心地が悪かったそのワードに3年いました。後半の1年6か月はとてもすてきな充実した時間でした。その後も時々難しい問題にぶつかるとはありましたが、わたしには主がいつも自分を心にかけてくださるということ、また苦しい経験は成長のためにあるのだという確信がありました。

ワードを去るころには、自分はワードの会員たちから、愛されているだけでなく、信頼され、認められていると感じるようになっていました。そして奉仕をしたり、人々に話したり、教えたりする機会だけでなく、自分の気持ちを謙遜けんそんにする経験や靈的な経験を数多くすることができました。こうして、ワードの会員はわたしの大切な家族になりました。

ジュリーは今も大切な友達です。彼女の天賦の才能は、今も変わらずわたしや多くの人々の人生に影響を及ぼしています。彼女の模範は、その光の源である救い主を知るにはどうしたらよいかを、わたしに示してくれました。そしてそれによってわたしは多くの人々を助け、愛し、慰めるための方法を学ぶことができました。成長を続けていけば、いつかわたしも主の愛に満たされ、自分の顔に主の面影を受ける日が来ると信じています。□

DETAIL FROM CHRIST AND THE RICH YOUNG RULER, BY HEINRICH HOFMANN





この場所を忘れないように

クリスタル・トーマス

ILLUSTRATED BY STEVE KROPP

氷の張った洞くつに足を踏み入れ、最初に感じたのはそのひんやりとした空気でした。そして奥へ進むほど、暗く薄気味悪くなっていきました。この洞くつへは、ガールズキャンプのハイキングで行ったのです。その暗さや陰気さにもかかわらず、洞くつでのひときは、自分がたどっている人生の方向について考える思いがけない好機となりました。

洞くつ探検が始まって間もなくのことです。わたしたちは、目的地に着くためにどうしても登って越えなくてはならない大きな岩のある場所まで来ました。わたしは、この岩が自分自身の問題や障害とどのように似ているか思い巡らしました。わたしは、自信をもって慎重に問題を克服しているだろうか。あるいは、岩を目前にした今の自分のように、障害を乗り越えようとして苦闘しているところだろうか。

遅れを取っていたわたしが見上げると、先にやすやす

と登って行った女の子たちの持つ明かりが見えました。

彼女たちの信仰の強さに励まされ、新たな力がわいてきて、わたしも岩を登り切ることができました。

洞くつの行き止まりまで来ると、指導者の一人がわたしたちに懐中電灯のスイッチを切るように言いました。真っ暗になったとき、サタンがいる所はこの洞くつのように、冷たく暗い所ではないかと思いました。わたしはそのときその場で、天父のもとへ帰り、家族と永遠に住めるように、新たな目標を幾つか作ろうと心に決めました。

再び明かりをつけ、出口に向かいました。出口付近には手書きの看板があり、「この場所を忘れないように」と書かれていました。「そうしよう、ずっと心にとどめよう」と思いました。この場所のおかげで、義になつたことをしたいという気持ちになれたのですから。□

日ごとの食物

「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。」(ルカ9:23)

救 い主が弟子たちに祈りの方法を示されたとき、その祈りの中には「わたしたちの日ごとの食物を、きょうもお与えください」(マタイ6:11)という嘆願がありました。この祈願を通してイエス・キリストは、地上のすべての良いものについて、わたしたちが日々天父に依存していることを思い起こさせてくださいました。万物は、「人の益と利用のため、目を楽しませ、心を喜ばせるために造られました(教義と聖約59:18)。

「まことに、食物のため、また衣服のため、味のため、また香りのため、体を強くするため、また霊を活気づけ

るために造られている」のです(教義と聖約59:19)。

体に与える栄養と同じように、霊の糧は神から賜うるものです。主はこのように説明しておられます。

「わたしが命のパンである。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決してかわくことがない。」(ヨハネ6:35)

救い主に従うとき、わたしたちの体も霊も天父の豊かな恵みによって糧を得て強められること、また両方とも、毎日注意して世話する必要があることを心に留めておかななくてはなりません。

わたしたちの霊は、日々十分な養いを必要としている

重い病気にかかっていると診断されたある若い女性は、困難な治療を受けた1年間、医師の指示に従い、食事制限と栄養について非常に多くのことを学びました。彼女は自分の食べたものを注意深く調べました。栄養学についてこれほど興味を持つことになるとは夢にも思わなかったと、友人に冗談を言うほどでした。そして、病気と闘いながら、**聖文の勉強や定期的な神殿訪問、日ごとの祈りが、自分の肉体の糧と同様に大きな支えになっていることに気づきました。**とりわけ、**教会の賛美歌が心を慰めてくれました。**

病気になる前にも、聖文の勉強や祈りを生活の一部としていましたが、彼女はこの日ごとの霊の糧に対して新しい見方をするようになりました。こう述べています。

「朝の祈りは、緑黄色野菜と同様に必要です。」毎日霊の糧を求めることにより、生活の中に救い主の力を感じられるようになったのです。

霊の糧を得ると、わたしたちは強められる

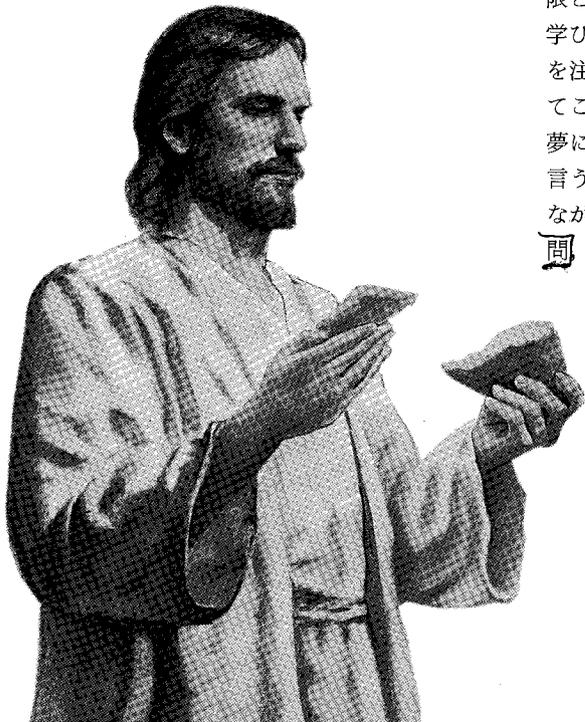
適切に世話をする事で肉体が丈夫になるように、わたしたちの霊も、世話をする事によって霊的強さを増し、試練に打ち勝ち、もっとよく救い主に従い、人生の使命を達成できるようになります。アルマがモーサヤの息子たちと再会したときの喜びは、この真実をよく表しています。「彼らは……神の言葉を知るために聖文を熱心に調べてきた……。

そればかりではない。彼らはしばしば祈り、また断食もしたので、預言の霊と啓示の霊を受けていた。そして、教えるときには、神の力と権能をもって教えた。」(アルマ17:2-3)

モーサヤの息子たちのように、わたしたちは次のような主の招きを受け入れるとき、自分の重荷を背負い、救い主に従う霊的な力を得られるのです。

「わたしのもとに来なさい。あなたがたは命の木の実を食べるであろう。あなたがたは価なしに命のパンを食べ、命の水を飲むであろう。」(アルマ5:34)

- 毎日、肉体と霊の両方に栄養を与え、強めるのはなぜ大切なのでしょうか。
- 毎日世話をすることにより、どのような成果が見られるのでしょうか。

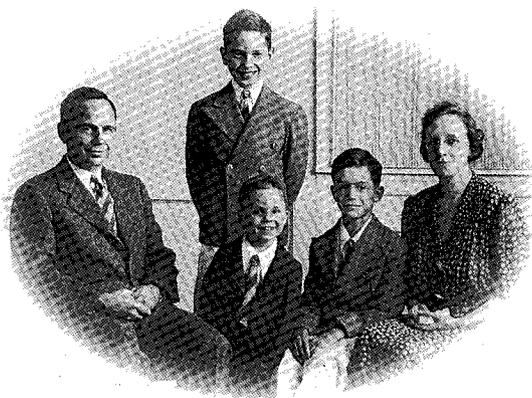


ILLUSTRATED BY DEL PARSON

ヘンリー・B・アイリング長老

「決定的影響」を受けながら歩んだ道

ジェラルド・N・ランド



人にはだれでも、そのときにはささいに思えるものがあるものです。後に非常に重要な出来事だったと気づくことがあるものです。1995年4月1日に十二使徒定員会の新しい会員として支持されたヘンリー・ベニオン・アイリング長老の人生もそうでした。アイリング長老にとって、十二使徒への召しは、彼が「決定的影響」と呼ぶそんな多くの出来事の集大成だったのです。

最初の、そして非常に重要な影響の一つは、幼年期の家庭生活でした。家族や友人から「ハル」と呼ばれていたヘンリー・B・アイリングは、1933年5月31日、ヘンリー・アイリングとミルドレッド・ベニオン・アイリングの3人の息子の2番目として生まれました。ハルが生まれたとき、父はニュージャージー州にあるプリンストン大学の化学の教授でした。

アメリカ東部に住んでいたため、アイリング家族は教会員の多い地域から遠く離れていました。家族の所属する小さな支部は、ホテルの一室で集会を開いていました。第二次世界大戦が勃発し、ガソリンが配給制になって車の運行に支障が出始めると、アイリング家がプリンストンの聖徒たちの集会所になりました。食堂のテーブルが話者の説教台と聖餐のテーブルを兼ねていました。母親が指揮者と伴奏者を同時に務めることも少なくありませ

んでした。ピアノを演奏しながら、足で拍子を取って、出席者が伴奏についてこられるように助けたのです。アイリング長老は、当時を思い出してほほえみます。ほかに覚えているのは、彼と兄弟のハーデン・R、エドワード・Mで支部のアロン神権定員会全員だったことと、末日聖徒の青少年もやはり自分たちだけだったということです。

父ヘンリー・アイリングは、科学者として大いに名声を博し始めていました。やがて彼は、数え切れないほどの名誉博士号を受け、ノーベル賞を除けば、化学分野の賞という賞をほとんどすべて受賞するようになります。「父に関して興味深いことは」とアイリング長老は回想します。「父が何を達成したかというより、どんな人間だったかということです。父はアリゾナ州のピマ出身で、深い信仰を持った控えめなモルモンの少年でした。後年の成功も父を変えることはありませんでした。」

ハルの人生における母ミルドレッドの影響も、父のそ

右ページ——十二使徒定員会のヘンリー・B・アイリング長老の近影。上——（左から）父ヘンリー・アイリング、兄弟のテッドとハーデン、幼いハルと母ミルドレッド・ベニオン・アイリング。



れに匹敵するほど重要なものでした。母は、ユタ州のグレインジャーの出身でした。高等教育を受ける女性が多く限られていた時代に、彼女はユタ大学を卒業し、同大学の女子体育学部の学部長を務めていました。大学を休職し、ウィスコンシン大学で博士号取得に向けて勉強していたとき、ヘンリー・アイリングと出会い、結婚したのです。アイリング長老は、次のような言葉を母にささげています。「母は、望めばどんなものにもなれたはずだったのに、わたしたちの母親になることを選んだのです。」

「ほんとうに好きなものを見つけなさい」

科学を心から愛していた父ヘンリー・アイリングは、息子たちが科学の道に進む準備として、3人に物理学を専攻するよう勧めました。ハルがユタ大学で物理学を勉強していたときの父との会話は、人生の「決定的影響」の一つとなりました。複雑な数学の問題を解くのに父の助けを求めたときのことです。「父は、地下室に置いてあった黒板の前に立っていました」と、アイリング長老は回想します。「父は急に説明をやめると、こう言ったのです。『ハル、1週間前にもこれと似た問題を二人で解いたはずだけど。あのときから、君の理解は全然進んでいないようだ。勉強していなかったのかい。』」

ちょっと恥ずかしく思いながら、ハルは勉強しなかったことを認めました。すると父は、「おまえには分かっているよ、シャワーを浴びているときも、ほかに考えなければならないことがあるときを除けば、四六時中その問題のことばかり考えていなかったのかい。」

アイリング長老は、こう打ち明けます。「考えていなかった、と答えると、父は口をつぐみました。ほんとうに心の痛む、悲しい瞬間でした。父がどれほどわたしを愛し、どれほど科学者の道に進んでほしいと願っていたか、よく知っていたからです。父はこう言いました。『ハル、物理学はやめた方がいいと思うよ。何か別に、好きで好きでたまらなくて、ほかのことを考えなくてもいいときはそればかり考えているというものを見つけるべきだ』と。」

この助言は若いハルに強い印象を残しました。朝鮮戦争終結後間もなく、彼は物理学の学位を取得して卒業しました。戦争中は、各ワードから召される宣教師の数が

極端に制限されていました。そのうえハルは、卒業前に空軍の士官として任務に就くよう義務づけられていたのです。こうして彼は、専任宣教師として奉仕することなく、空軍に入隊することになりました。しかし、入隊前に監督から受けた祝福には、軍隊で伝道を経験することになるだろう、という約束の言葉がありました。

その祝福はやがて成就しました。空軍は最初に彼を、短期講習のためニューメキシコ州アルバカーキー近郊のサンディア国立研究所に配属したのですが、状況が変わって結果的に丸2年間そこで勤務することになりました。任地に到着して2週間後、彼は西部諸州伝道部の地方部宣教師として召されました。そして、ほぼ完全に2年間、宣教師としての責任を果たしたのです。

兵役を終えたヘンリー・アイリングは、勉学を続ける決心をしましたが、物理学には進みませんでした。彼は、マサチューセッツ州ケンブリッジのハーバード大学ビジネス大学院に進学し、経営管理学の修士号を取得しました。大学院を終えるころ、父の昔の助言が実に重要な意味を持つことになります。どんな業種に就職すべきか決断を迫られていたとき、彼はどの分野にもあまり魅力を感じないことに気づいたのです。そして、自分がほんとうに好きなのは、経営管理学を教えること、すなわち人が複雑な過程を理解し習得できるように助けることなのだと思えました。彼はハーバードに残り、ビジネス管理の博士号を取得します。博士論文を書き終える前に、すでにカリフォルニア州パロアルト市のスタンフォード大学経営大学院の助教授の職が約束されていました。

ハーバードで勉学を続ける決心は、ほかの理由でも重要な意味を持つことになります。つまりその決心のおかげで、1961年の夏にカリフォルニア州パロアルト市のJ・シリルとラブレル・リンゼイ・ジョンソンの娘キャスリーンが夏期講習でボストンにやって来たとき、彼がまだボストンにいたからです。当時、ボストン地方部長会で副地方部長を務めていたハルは、独身成人の早朝野外礼拝を管理する責任を与えられました。

集会の後、木立ちから出て来る若い女性が目に留まりました。彼は、その女性の美しさに衝撃を受けたばかりでなく、その瞬間デビッド・O・マッケイ大管長の言葉を思い出したと言います。「もし、そばにいただけで…最善を尽くして頑張りたいと思わせてくれる女性に出会ったなら、……その女性こそ、あなたの愛を受けるにふさわしい人です。」(Gospel Ideals『福音の理想



結婚披露宴でのヘンリー・アイリングとキャスリーン夫人。

p.459)「初めてキャスリーンを見たとき、まさにそのとおりに感じたのです」とアイリング長老は言います。

ハルとキャスリーンは、次の日曜日に教会で紹介されました。「ハルが特別な人だと分かりました」とキャシーも述懐します。「彼は大切な事柄について深く考える人でした。」

二人は夏が終わるまで楽しく過ごし、キャスリーンがカリフォルニアに帰ってからは、手紙や電話で交際を続けました。そして、1962年7月、ローガン神殿でスペンサー・W・キンボール長老の司式により結婚したのです。

「これは主の学校である」

キャシーは単なる良妻賢母以上の存在でした。ヘンリー・B・アイリングの人生における「決定的影響」の一つになったからです。いちばん良い例は、ハルがスタンフォードで教鞭^{きょうべん}を執るようになって9年たった時のことです。二人にとって、豊かで非常に満ち足りた時期でした。スタンフォードでは、教えていたカリキュラムの編成にかなりの裁量が認められていましたし、マサチューセッツ工科大学のスローン経営スクールから客員教授として招かれ、1年間ボストンに戻る機会もありました。また、ビジネス面でも、フィニガン精密機器株式会社の取締役兼社長に就任していたほか、システム産業株式会社というコンピューター製造会社を創業し、その社長も務めていました。教会では、早朝セミナーの教師やホームワードの監督会の責任を果たした後、学生ワードである、スタンフォード第一ワードの監督として召されていました。

しかし、それもこれもすべてが一転することになります。アイリング長老はこう報告しています。「ある晩、

キャシーがわたしをひじてつくと、こう尋ねたのです。「あなた、人生で自分が正しいことをしているっていう確信がある？」と。」長老は少し口をつぐみ、それから説明してくれました。「驚きましたよ。当時のわたしの状況を考えてみてください。スタンフォードで教授としての終身在職権を得ていましたし、スタンフォードのワードで監督もしていました。妻の両親宅の隣に住んでもいました。わたしは自分のしていることをほんとうに気に入っていたのです。まるで、エデンの園にいるようにね。それなのに、妻はわたしにそんな質問をするんです。」彼女は、続けてこう尋ねました。「ニール・マックスウェル長老のところで研究できないかしら。」アイリング長老はもう一度言葉を失ったと言います。「ここをよく理解していただきたいんです。ニール・A・マックスウェル長老は当時、教会教育理事長を務めていました。キャシーはまったく彼と面識がありませんでしたし、わたしも同じでした。」

その夜のことをキャシーに尋ねると、どうしてそんな質問をしたのかよく分からないと答えます。「スタンフォードでのわたしたちは、確かにとても幸せでした」と彼女は言います。「でも、なぜか、彼にはもっと大切な、何かほかになすべきことがあるように感じていました。スタンフォード大学での教授生活が彼にとってすばらしいものであることは分かっていたのですが、もっとほかに人の生活を真の意味で変えるような事柄を教えられるはずだと感じたのです。」キャシーは、教会教育部(CES)について聞いていましたし、なぜか、その理事長がニール・A・マックスウェル長老だということを記憶していました。前述の彼女のコメントには、こういう背景があったのです。

ハルにはそれだけで十分でした。彼は祈ってみようと決心しました。最初は何の答えもありませんでした。少なくとも彼にはそう思えました。しかし、それから少したったある日、ハル・アイリングのことを人づてに聞いて知っていたマックスウェル理事長から電話があり、ハルにソルトレーク・シティまで来てくれるように要請したのです。彼は出かけて行きました。

アイリング長老はそのときのことを思い出します。「わたしが両親の家に滞在していたので、マックスウェル長老はそこまで出向いて来てくれました。彼の最初の言葉は、『ハル、あなたにリックスカレッジの学長に就任していただきたいのです』というものでした。」

ここでアイリング長老はほほえみます。「わたしが東部育ちだったこと、そしてずっとカリフォルニアに住んでいたことを思い出してください。当時のわたしは、リックスカレッジがどこにあるかも知りませんでした。リックスカレッジが2年制か4年制か尋ねられても、わたしには答えられなかったでしょう。」

しかし、そのような重要な召しを軽んじはしませんでした。ソルトレーク・シティ滞在中に、彼はもうこの要請について祈り始めていました。1日、2日と、答えの得られない日が続き、悩みました。「そして、また祈っていると、『これは主の学校である』という、非常に明解で強い印象が与えられたのです。」この答えで十分だと感じた彼は、カリフォルニアに戻り、キャスリーンとともにスタンフォードを去る準備を始めたのでした。



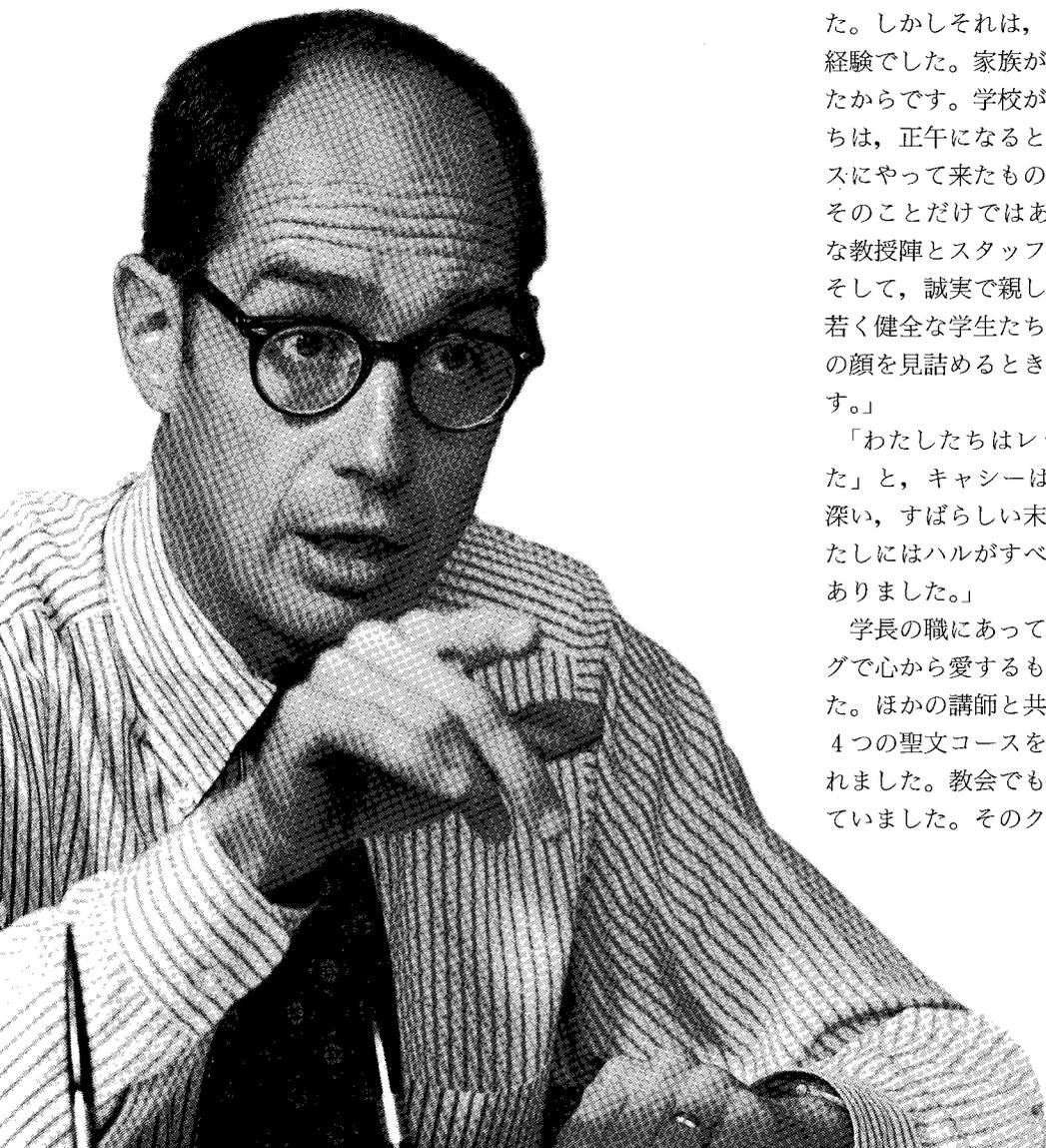
左下——教師は、アイリング長老の何よりも好きな仕事である。上——二人の孫に本を読んで聞かせるアイリング長老。

そして、1971年12月10日、ヘンリー・B・アイリングはリックスカレッジの学長に就任しました。

大都市近郊の全国有数の有名大学から、アイダホ州レックスバーグという農村地帯にある小さな2年制の私立大学に移るのは、確かにかなり大きな環境の変化でした。しかしそれは、アイリング家にとってはすばらしい経験でした。家族が互いにより親しく交わる機会となったからです。学校が大学に近かった年長の二人の息子たちは、正午になると、一緒に昼食を食べに父親のオフィスにやって来たものでした。しかし、有意義だったのはそのことだけではありません。「リックスでは、献身的な教授陣とスタッフに囲まれて働くことができました。そして、誠実で親しみやすく、主への奉仕に献身的な、若く健全な学生たちがいるのです。信仰深く知的な彼らの顔を見詰めるとき、わたしは深い感銘を受けたものです。」

「わたしたちはレックスバーグの人たちが大好きでした」と、キャシーは当時を思い出して言います。「信仰深い、すばらしい末日聖徒たちばかりです。それに、わたしにはハルがすべきことをしているのだという確信がありました。」

学長の職にあっても、アイリング兄弟はレックスバーグで心から愛するものを追及する機会を逃しませんでした。ほかの講師と共同で、宗教のクラスを教えたのです。4つの聖文コースを全部教え終わるまで、それは続けられました。教会でも、日曜学校の独身成人クラスを教えていました。そのクラスを受講したある若い男性から、



当時の経験をつづった手紙が、最近、教会機関誌編集部に寄せられました。手紙には「あのころ、少し反抗的だったわたしの信仰は揺らいでいました」と書かれています。友人たちとアイリング兄弟のクラスに出るようになったのは、ちょうどそんなときでした。彼はそこで、必要としていた影響を受けることができたのです。そして伝道に出、神殿結婚をし、それ以来活発に教会に集っています。「自分がどのくらい多くの学生たちに、どれほど大きな影響を与えたか、アイリング長老自身は御存じないのではないのでしょうか」と記した後、この手紙は次のように結んでいます。「今のわたしがいるのは、キリストの偉大な弟子の静かで力強い影響力のおかげです。」

「だれを助けることができるでしょうか」

今では4人の息子と2人の娘に恵まれているアイリング夫妻は、人生における互いの影響に敬意を表しています。アイリング長老は、確信をもってこう言います。「今までの長年にわたる経験から、キャシーを初めて見たときの第一印象は正しかったようです。わたしがいつも最良の自分でありたいと願ひ続けてこられたのは、彼女のおかげです。」

物柔らかな口調のアイリング姉妹は、長老についてこう語っています。「確固……それが彼を形容するのに最も適切な言葉の一つです。すばらしい夫であり、父親です。とても愛情深い人なんです。ハルについて感謝していることの一つは、彼の御霊みたまに対する豊かな感受性です。それによって家庭に御霊をもたらししてくれるのです。」

父の模範のおかげだと、アイリング長老は言います。「わたしの父は、どんなに重い責任や大変な仕事があっても、わたしたち家族と一緒に時間を過ごすのを忘れませんでした。それは、わたしたちといるのが大好きだったからです。わたしも同じです。土曜の朝に家族でする仕事を計画したり、家庭の夕べのために手の込んだ水彩のイラストを描いたりするのも、わたしにとってはとても楽しいことなのです」と、笑いながら認めます。

ヘンリー、スチュアート、マシュー、ジョンというアイリング家の4人の息子たちは、それぞれ実業家の道を歩んでいます。そのうち結婚している3人は、今のところ両親に7人の孫をプレゼントしてくれています。

アイリング家の長男ヘンリーが、彼にとって特に大切

な経験を話してくれました。「日本で伝道していたときのことです。揺るぎない自信と大きな期待をもって、わたしは伝道に出かけて行きました。」しかし、10か月過ぎても、一人もバプテスマに導くことができませんでした。「ほんとうに意気消沈してしまいました」とヘンリーは話を続けます。「とてもがっかりしていました。そんなとき、父から短い手紙が届きました。」要約すると、たとえ、日本の人たちに拒まれても、神は決して彼を拒みはしないということと、ヘンリーの父は息子の働きを喜んでいるということが書かれていました。

少し感傷的になりながら、ヘンリーは言います。「この経験がわたしにとってそれほど大切になったのは、そのとき、もし神御自身がその手紙を書かれたとしたら、まったく同じ言葉を贈ってくださったに違いないと感じたからです。」

マシューは父の影響についてこう語っています。「わたしたちが価値ある人間だと感じさせてくれる能力を父は持っています。このすばらしい父の能力を子供たち全員が感じています。いつもわたしに、もっと頑張ろうという気持ちを起こさせてくれました。父は、毎晩祈っていることが二つあるとわたしたちに話してくれたことがあります。まず最初が、『頂いた祝福の中で、わたしの気づいていない祝福は何ですか』という質問で、二つ目は『だれを助けることができるでしょうか』というものでした。」マシューはこう付け加えます。「父は、この二つの祈りがこたえられなかった日は一日もなかったと言っています。」

エリザベスとメアリー・キャスリーンは、アイリング家の子供の中で最年少の二人です。ユタ州バウンティフルの中学に通うエリザベスは、毎月、お父さんの小切手帳の残高計算を手伝うのが、自分の仕事だと言います。アイリング家では、エリザベスとメアリー・キャスリーン、そしてお父さんの3人で、月1回、家族新聞を発行しています。方々に遠く離れて住んでいる家族と、こうして連絡を取り合っているのです。「お父さんがタイプを打ちます」とエリザベスが説明してくれます。「わたしが編集委員で、メアリー・キャスリーンが美術担当です。」

11歳のメアリー・キャスリーンは、ヘンリー・アイリングを父に持つことの感想を、「楽しいです」の一言に凝縮してくれました。父親と一緒に水彩画を描いたり、家族のためにパンを焼いたりします。アイリング長老が

時々朝食を作ると聞いたので、新しい召しで忙しくなった今も、まだ朝食を作ることがあるかどうか、家族に尋ねてみました。「今朝もわたしの朝御飯作りを手伝ってくれました」というメアリー・キャスリーンの答えが返ってきました。

リックスでの学長時代、ヘンリー・アイリングは多くの中央幹部やほかの教会指導者と親しく交わる機会に恵まれました。ヘンリーは、まず地区代表に召され、次いで、日曜学校中央管理会の管理会員に召されました。リックスで5年間学長を務めた後、当時の教会教育理事長、ジェフリー・R・ホランドに、彼の代理として働くように要請されました。

それから3年後、ホランド長老がブリガム・ヤング大学学長に就任したのに伴い、ヘンリー・アイリングが新しい教会教育理事長に召されました。

教会教育部での奉仕は、ヘンリー・アイリングが教会についての展望を広げる新たな機会となりました。アイリング長老は言います。「様々な場所を訪問して、多くのセミナー教師たちと出会いました。若い人々への愛のゆえに、すべてをささげて彼らを教えている人々です。

世界中のあちこちにある教会の学校を訪ね、美しい子供たちの顔に見入ったとき、教会の未来はここにあるのだと気づきました。子供たちに気持ちよい学習の場を与えようと、四つんばいになって床を磨いたり、暑い太陽の下で校庭の美化に励んだりする大人の男女も目にしました。教会の強さが教会員たちの素朴な信仰と献身に根ざしていることを思い起こさせてくれる、すばらしい経験でした。」

「主の助けをより必要として」

現在教育部で宗教教育および学校管理を担当しているスタンリー・A・ピーターソンは、アイリング長老が教会教育理事長代理に召されたとき、副理事長に召されました。「アイリング長老とは18年間密接に働いてきました」と彼は言います。「彼は、主に仕え、幹部の指導者たちに従いたいという強い願望の持ち主です。」

1985年4月の総大会で、アイリング家に再び思いがけない変化がもたらされました。アイリング教育理事長が、管理監督を務めていたロバート・D・ヘイルズ監督の第一副監督として支持され、アイリング監督となったのです。ヘイルズ監督とともに働く機会も、アイリング長老

にとって決定的影響の一つとなりました。「ヘイルズ監督は、すばらしい導き手であり、友人でもありました」とアイリング長老は言います。「彼から受けた影響は計り知れません。」

1992年9月、アイリング監督は、数年間空席になっていた教会教育理事長の職に復帰するよう、大管長会から要請されました。1か月後には管理監督会から解任され、七十人第一定員会の会員として支持を受けましたが、長老の奉仕の大部分は教育理事長としての責任を果たすことにありました。では、今度の十二使徒への召しにより、教育理事長としての立場に変化はあったのでしょうか。長老は、「しばらくは、わたしの教育関係の担当は変わらないでしょう。ただ、スケジュールが変わっただけです」とほほえみながら説明します。

教会が世界150か国に900万人以上の会員を擁するようになったこの時代に十二使徒定員会に召されたことに関して、アイリング長老は過去の決定的影響の数々に感謝の意を表します。

「主はわたしに、多くの会員の視点から教会を見る機会を与えてくださいました。わたしが成長したのは、大きなワードでもステーキでもありません。わたしの最初の教会経験は、家族的な、ごく小さな支部でした。空軍時代に地方部宣教師として召されていたときは、インディアン居留地で伝道する機会に恵まれました。ハーバード時代もやはり地方部でした。そこがステーキになったのは、わたしが引越した後のことです。また、教会教育部で働いていると、主と主の王国のために文字どおり献身的に働く人々に会うことができます。十二使徒の召しにこれ以上役立つ準備は考えられません。」

新しい召しを受けて少し時間がたった今、十二使徒になったことをどう受け止めているのでしょうか。長老はためらわずにこう答えます。「この聖なる職にあって、さらに効果的に奉仕しようと努力するとき、主の助けの必要性を日増しに強く感じています。」

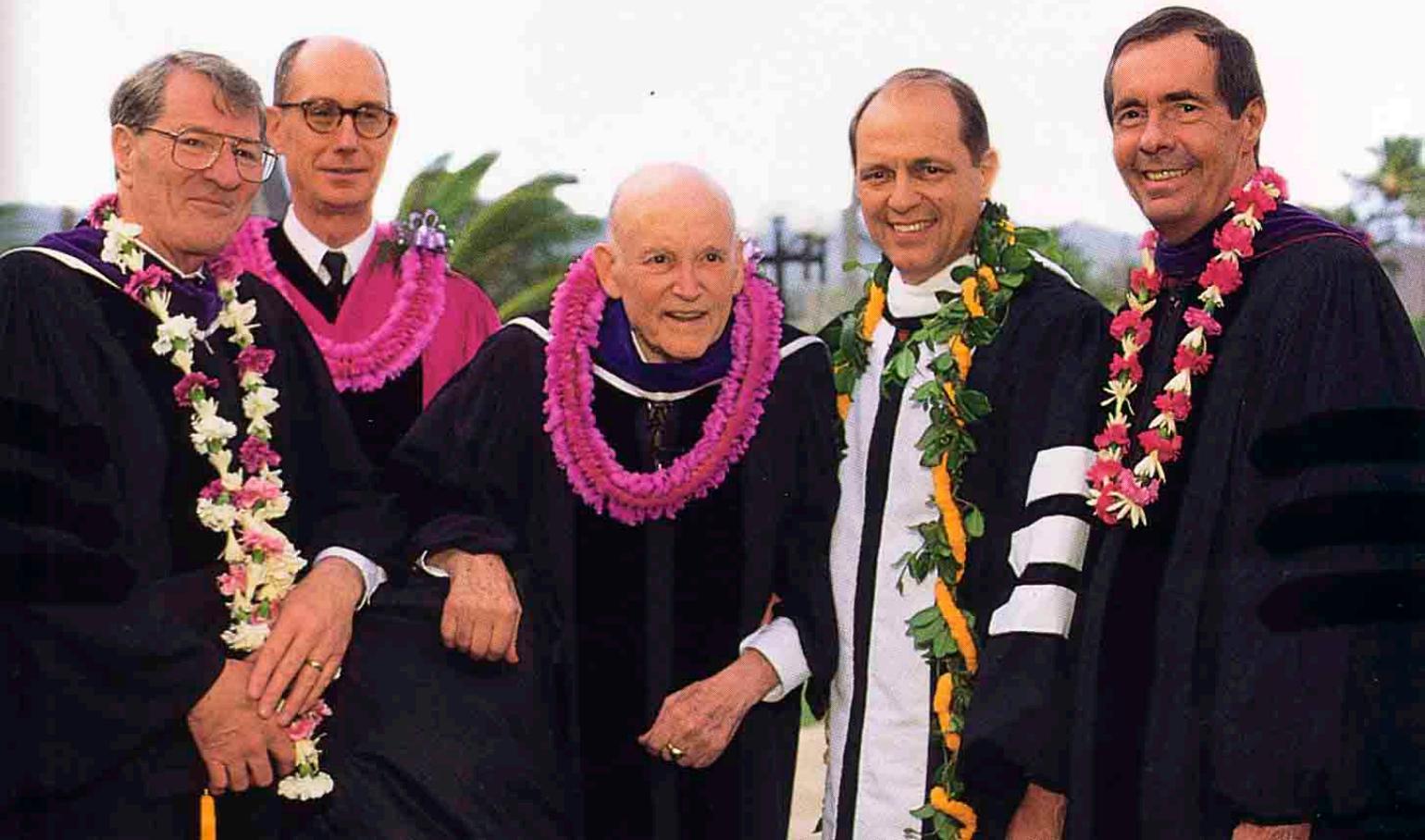
そうです。「決定的影響」が、ヘンリー・B・アイリング長老の人生を形作る助けとなってきたのです。十二使徒定員会の一員となった今、主イエス・キリストの特別な証人として奉仕する機会が与えられています。アイリング長老はこれからも、御父とその独り子から受ける以上の「決定的影響」はないことを心に留めながら、その証を全世界に広めるうえで大いなる貢献をしていくことでしょう。□



上——最近のアイリング家族。(前列左から) 娘メアリー・キャスリーン、アイリング長老夫妻と娘エリザベス。(後列左から) 息子のジョン、マシュー、スチュアート、ヘンリー。



上——ヘンリー・アイリングと母親。下——ブリガム・ヤング大学ハワイ校の学長就任式で。(左から) 十二使徒定員会のニール・A・マックスウェル長老、当時七十人だったアイリング長老、ハワード・W・ハンター大管長、ブリガム・ヤング大学ハワイ校新学長エリック・B・シャムウェイと当時のBYU学長レックス・E・リー。



冬 になると、茶色の大地は生命が失われたように見えます。去年、色とりどりに咲いたチューリップの花の姿もだんだんと忘れ去られ、来年ほんとうに花が咲くのだろうかと思えるほどです。今、球根は冷たい地中に眠っているのです。

春になると、暖かい太陽に誘われて、緑色の芽が少しずつ地表に顔を出します。そして再び、花が咲くのです。こうして野原は色とりどりの生命で覆われます。

春の花は誕生、生命、復活の伝統的な象徴です。復活祭の時期になると、オランダ・ハーグステークの末日聖徒の青少年は、チューリップや水仙、クロッカスに取り囲まれます。花は、生命がいわゆる死という一次的な別れで終わりを告げるものではないということ、そして、救い主イエス・キリストが栄光に満ちた復活をされたために、あらゆるものは再び生き返るということを、すばらしい形でわたしたちに思い起こさせてくれます。

オランダに咲く花

写真・文ノマービン・K・ガードナー、フライアン・K・ケリー



「ホームティーチングでレッスンをしたときのことです」と語るイオス・レインデス（16歳、下）。「イエス・キリスト、復活、来世について話しました。レッスンをしている間、それが真実であると感じました。心の底からそう感じ、涙が出そうでした。」

「時々、生きることがとても難しく感じます」と語るのはネル・プリンス（19歳、中央）です。弟のジャン（16歳）とヘンク（17歳）も同僚です。「でも、主が助けてくださいます。わ

たしはよく心の中で主と話し合います。いつも主を身近に感じ、頼ることができるんです。」

「セミナーを通して、『聖書』の物語は真実であると分かってきました」と、ヘンクは語ります。「イエス・キリストがぼくのためにしてくださったことの真の意味と、主が命を犠牲とされなければならなかった理由が理解できました。そして、主を自由に崇拝できるようになりました。」





彼ら若いオランダの聖徒たちは、自分の国とその美しさを誇りに思っています。この世的な多くの問題に直面してはいますが、美しい福音の影響を受けて彼らの生活と顔は輝いています。

彼らの強さを支えているものは何でしょうか。まず最初に返ってくる答えはセミナーです。ほかにも、祈り、聖文、両親と家族、祝福師の祝福、若い男性・若い女性の活動、奉仕活動、ユースカンファレンス、神殿訪問（ド

イツ）、専任宣教師と一緒に働くことなどが挙げられます。ジャン・プリンス（下）によると、末日聖徒の青少年は互いに助け合い、強め合っています。





「わたしの学校のたいていの生徒はたばこを吸っています」と、タニヤ・ブルークマン（16歳）は言います。「みんなの品行はあまりよくありません。そしてわたしにも同様の行いをさせようとしています。わたしがいつも断るので、どこかおかしいんじゃないか、と思っているようです。なぜわたしが教会へ行き、自分のしていることを正しいと信じているか理解できないのでしょう。」

「学校で教会員はほくだけです」と語るイオス・レインテスは、多くの末日聖徒の青少年と似通った経験について語っています。「婚前交渉をするようにみんなから勧められます。テレビや映画では、それがごく普通のことだからです。でも、ほくは否定します。結婚するまで待ちたいと思っているからです。ずっと前から、そう決心しているんです。」

タリタ・バン・デプト（17歳、左上）はこう言っています。「わたしは自分の標準を守ります。友達にわたしの信条を知っています。酒や麻薬などやなくても、楽しく過ごせますよ。」

「父と一緒に毎日聖文を読むことによって、証を得ました」と語るロバート・カット（14歳、右上）。「毎朝、一緒に聖文を読み、セミナーの家庭学習課題を勉強したんです。」



「主が生きておられ、わたしが助けを求めるときにはいつでも助けてくださることを知っています」と語るゲイビー・ジャンセン（16歳、左下）。「主は毎日、わたしを祝福してくださっていると思います。」

マーティン・テッカー（15歳）はこう言っています。「すべきでないと分かっていることをするよう友達に言われたら、こう答えるんです。『ほくはやらないよ』って。彼らは自分の望みどおりに行動できます。でもほくは、自分の選びに従って行動するんです。」





最 近オランダでは、農夫が履いている以外には、伝統的な木靴を見かけることはあまりありません。しかし、風車、つまり古い絵にあるような風車は、新しいハイテク風車とともに今もたくさん活躍し、海拔ゼロメートル以下の土地から水をくみ上げてい

ます。そして、運河は水を海へ運び、堤防は海の水が押し寄せるのをとどめています。このようにしてオランダ人は、海から土地を干拓し、利用可能で生産的な農地に変えているのです。

同様に、人々が福音を完全に受け入れ、自分の生活を主に向けるなら、主



の無限の力と慈悲と恵みにより、人々は心を改め、自らを変えていけるでしょう。

「わたしは奇跡だと思えるような小さなことによく出会います」とジャネット・クレイバーク (15歳, 右) は話します。「例えば、何年もの間教会を休んでいた人が、突然戻って来たことがありました。彼は完全に生活を改め、再びとても活発になったんです。そのようなことを目にできるのは、まさに奇跡だと思います。」





「去年、わたしの友達の一人が教会に入りました」と語るタニヤ・ブルークマン（16歳、右）。「わたしは彼女を教会へ連れて行き、活動に招待しました。彼女は関心を持ち始め、もっと多くのことを知りたがりました。そして、最終的にバプテスマを受けたのです。」



デビー・レインデス（18歳、下中央、一緒にいるのは早朝セミナーの仲間たち）はこう語っています。「わたしはこれまでいろいろな経験をし、それによって多くのことを学びました。祈るとき、天父はわたしを助けてくださいます。聖文に書かれていることは真

実です。イエス・キリストについて、また主がわたしのためにしてくださったことについて、わたしには証があります。証のおかげで、人生の難問を乗り越え、福音に忠実に進むことができますのです。」□





奉仕の機会を 見つける

タマラ・リーザム・ベイリー

PHOTOGRAPH BY STEVE BUNDERSON

奉をしたいのに忙しくてできない、と感じたことはありませんか。わたしたちの生活は、教会活動、クラブ活動、学校の勉強、宿題、仕事、友達づきあいなどで多忙を極めがちです。時として、奉仕する時間がまったくないように思えます。しかし、奉仕は必ずしも大がかりなものである必要はありません。小さな奉仕の行いが大きな影響を及ぼすことが往々にしてあるのです。以下に列記した奉仕活動を行ってみませんか。ほとんどの活動は15分もかからずに行えるでしょう。

- 初めて会う人にほほえみかける。
- 弟や妹、または近所の子供に物語を読んで聞かせる。
- 店員にほほえんで「ありがとう」と言う。
- 友人にカードを送る。
- 心を込めて人に賛辞を送る。
- 友達と活動をする際、だれか新しい人を誘ってみる。
- 病気の友人を見舞う。
- 家族のためにベッドを整えたり、布団を敷いたりする。
- お父さんに「ありがとう」と言う。
- 転居して来た近所の人と会ったら、立ち止まってあいさつする。
- 赤ちゃんのいるお母さんが**せいさん**の話をゆっくりと聞けるように、泣いている赤ちゃんのお守りをする。
- 宣教師に短い手紙を書く。

- 家の手伝いを、言われる前に進んで行う。
- 教会の集会后、ごみを拾う。
- 祈るときに、祝福を必要としている人を思い起こす。
- お昼の弁当を、十分に持って来なかった人と分け合って食べる。
- 手助けが必要な人と一緒に勉強する。
- バスや集会で席を譲る。
- 話しかけてくる人の話を真剣に聞く。
- 教会員でない友達を家庭の夕べに招待する。
- ミューチャルの活動後、掃除の手伝いをする。
- 人のためにドアを開ける。
- 花壇の雑草取りをしている人をしばらく手伝って、名前を明かさない。
- 弟や妹の壊れたおもちゃを直す。
- お父さんや兄弟が日曜日に教会へ着て行けるように、ワイシャツにアイロンをかける。
- 子供を散歩に連れて行って一緒に夕焼けを見る。
- 日曜学校の教師がクラスのためにしてくれているすべてのことに対し、レッスン後に感謝の言葉を述べる。
- まだ幼くて字が読めない弟や妹に1日15分間聖文を読んであげる。
- 奉仕する機会が得られるように祈り、聖霊のささやきに耳を傾ける。□

木彫りのナイフ

エイミー・ジョー・ジャクソン

ILLUSTRATED BY KEITH LARSON

幼いころのわたしは、父とともにあまり多くの時間を過ごせませんでした。父が一日中大学へ行き、夜もほとんど毎日遅くまで勉強をしていたからです。父はそのような生活にほとんど疲れていましたが、母と4人の子供たちに支えられて頑張りました。

わたしは、父が作ってくれた木彫りのおもちゃでよく遊びました。父は時間があると、積み木や、木彫りの動物、パズルなどを作ってくれたのです。ただ、わたしがいちばん気に入っていたのは、父が小さな木片を彫って作ってくれた小さなナイフでした。わたしが何よりすてきに思ったのは、想像上の敵とそのナイフを使って戦えることではなく、父がほかでもないわたしだけのためにそれを作ってくれたという事実でした。

わたしは、父のことを心から誇りに思っていました。父に匹敵する人はいないと思いました。ありきたりの木から、あの小さなナイフのようにすばらしいものを作り出せるのですから。わたしはただ座って、ナイフを両手に持って眺めては、父がそのナイフを作るために費やしてくれた時間について思いをはせたものです。

何年かして、父は学校を卒業しました。昼間にできる良い仕事が見つかり、父と過ごす時間は少し増えましたが、そ

のナイフの価値が薄れることは決してありませんでした。

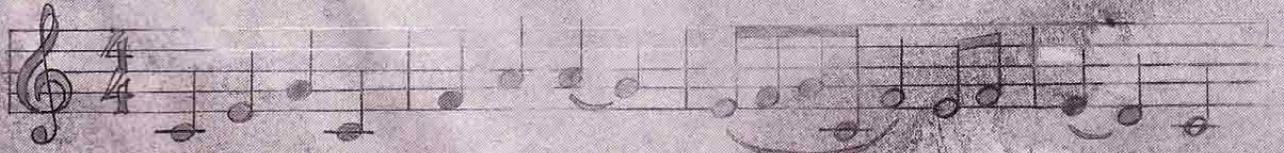
ある日、外から歩いて帰って来たわたしは、とても懐かしい光景を目にしました。父が家の入り口に座り、右手のポケットナイフで、左手の木片を、ゆっくりと小さなナイフの形に彫っていたのです。父が木を彫り、楽しそうに口笛を吹く中、木の小さな切りくずが幾つも空に舞い上がるのが見えました。父は、わたしの方に顔を向けるとほほえんでくれました。

気がつくと、わたしも父の横に座り、ポケットナイフを右手に、一片の木を左手に持って座っていました。父からナイフの彫り方を習ううちに、それまでの2倍の量の切りくずが空に舞い上がりました。わたしの作ったナイフは、父のものほどうまくはできませんでしたが、それは大して問題ではありませんでした。父がわたしの隣に座っていたこと、それがいちばん大切だったのです。

時々わたしは満面の笑みを浮かべて父を見上げ、自分のナイフと父のものを比べました。父は口笛を吹きながら、無心に彫り続けていましたが、わたしの視線に気づくと、にっこりとほほえみ、ウインクしてくれました。そのウインクでわたしはとても幸せな気持ちになりました。父はほんとうに幸せなとき、いつもわたしにウインクしてくれるのです。そしてわたしも父にウインクを返しました。□







賛美歌が
もたらした
希望

アネット・P・ボーエン



高校を卒業してから、クレイトン家*を訪れることのないままにもう20年近くたっていました。高校時代の親友だったケリー・クレイトンとわたしは、お互い復活祭に家族に会うために帰郷すると知って、ケリーの家で再会することにしました。

彼女の家に向かって歩きながら、わたしはクレイトン一家が直面している大変な試練について思い巡らしました。3人の子供を抱えたケリーは、離婚を目前にして傷心の日々を送っていましたし、彼女のお父さんは最近脳卒中で倒れ、お母さんはその看病と家計を支えることで四苦八苦していました。

「こんなにたくさんの苦しみが一度に降りかかってくるなんて。」そう思いながら、わたしは呼び鈴を鳴らしました。

ケリーが玄関の扉を開け、両手を広げてわたしに抱きついてきました。彼女と会うのは5年ぶりでしたが、精神的な重荷が彼女に残した傷跡がありありと見て取れました。わたしを抱き締める彼女の体はとてもやつれていて、悲嘆に暮れる気持ちが伝わってきました。壁の写真に写った、幸せそうな少女時代の輝く瞳とは対照的に、彼女の目には苦悩の色が満ちていました。

ケリーのお母さんがあいさつに出て来てくれ、ケリーに呼ばれてかわいらしい3人の子供たち、女の子2人と男の子1人も現れました。子供たちの顔には父親の面影が見受けられ、離婚という痛々しい事実がまた思い出されました。この家族はこれからどうやって生活していくのだろうかと考えてしまいました。

お父さんは2階の寝室にいるとのことでした。上がって行って話をしたいと言ったのですが、「自分で下りて来たいって言うの。しばらくかかるから、座って話してしましょよ」というケリーの言葉に従いました。

わたしたちは居間に向かい合って座りました。高校時代、そこでよく笑い合ったものでしたが、今日は違います。ケリーは、経済的にいかに大変かについて、また、これから独りでやっていかなければならない不安について打ち明けてくれました。でもわたしには、ただ黙って聞いてあげることしかできませんでした。彼女が抱える数々の疑問に対して、わたしは何の答えも持ち合わせていなかったのです。

しばらくして階段の方から物音が聞こえました。振り返ってみると、ケリーのお父さんが危なげな足取りで階段を下りようとしているところでした。傍らに立つお母さんの助けを借りようとはせず、手すりにつかまりながら、一段ずつ、少しずつ前に足を出して下りて来ました。

やっとわたしのところまでたどり着いた彼は、わたしの手を握り締めて「君にまた会えてほんとうにうれしいよ、アネッテ」と言ってくれました。

両親が台所に入って行った後で、ケリーはわたしにこう尋ねました。「人生がこんなにも大変になるなんて思ったことある？ここに座ってわたしの離婚話を聞いたり、父が苦しむのを見たりするなんて考えたことがあって？なぜこんなことが起こるのかしら。」

しばらく沈黙が流れた後、お父さんの腕や足を運動させるのに合わせてゆっくり数を数えるお母さんの声が台所から聞こえてきました。彼女がどんな思いで彼の世話をしているかを思うと、涙が込み上げてきました。

「ごめんなさいね」とケリーが言いました。「復活祭に帰郷したあなたにこんな思いをさせて。」

「いいのよ。」鼻をすすりながらわたしは答えました。「こんなときのための友達だもの。ただ、あなたに少しでも助けや希望を与えられるような言葉を何か言ってあげられたらと思うんだけど。」

ちょうどそのとき、ケリーのお母さんが歌い始めました。ケリーとわたしは話すのをやめて、台所から流れてくる天使のような歌声に耳を傾けました。その賛美歌は、復活祭の週末に、そしてその場面にぴったりでした。

主はよみがえりぬ アレルヤ
み使い、人、皆 アレルヤ
喜びたえ アレルヤ
地はみ空に答える アレルヤ
(『賛美歌』115番)

お母さんが最後まで歌い終わり、アレルヤという言葉が家中に響き渡るのを聞きながら、わたしはキリストの苦しみ、死への勝利、そして復活に思いをはせました。その日わたしの心に重くのしかかっていた絶望感は消えうせ、希望の光が輝き始めました。最も愛に満ちた優しい羊飼いが、この家族を愛し見守っておられることを知ったのです。

「あなたは独りぼっちじゃないわ。」わたしは、ケリーに静かに語りかけました。「あなたも、そしてあなたのお父さんも天父の御手に包まれているのよ。」

「そうよね」とケリーが答えました。わたしたちはとめどなく涙を流しながら、賛美歌の調べとともに心が天に向けられ、希望がわき出てくるのを感じました。□

*ここで使われている名前は実名ではありません。

地には平和を

七十人

ロバート・E・ウエルズ

キリストがこの地上にお生まれになったとき、天使たちは「地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」と言って神を賛美しました（ルカ2：14参照）。ところが、それからの2,000年間、世に平和が訪れたことはほとんどありませんでした。対立している国々もあり、大きな不安で満ちている国々もあります。キリストの贖罪しよくざいがわたしたちを肉体的、霊的な死から救ってくれるように、人類の救い主が語られた平和も物心両面にかかわるものです。

救い主は山上の垂訓の中で心の平和について語られました。そして、平和と平和をつくり出す人たちに触れた至福の教えをお授けになりました。山上の垂訓はどれも皆、わたしたちが完成への道を歩むための道標であり、完成と平和を目指す永遠に続く道にあって身に付けるべき特質について語っています。イエスはこの完成と平和を模範によって示されました。

山上の垂訓が初めて説かれたときのことを考えてみましょう。わたしの心には、平和で美しい光景が浮かんで





きます。早春の午後でしょうか。たそがれの空は穏やかで風一つありません。澄んだ青空には白い巻雲が絵のように浮かんでいます。見下ろすとガリラヤの海辺では漁師の船にさざ波が打ち寄せています。群衆が丘の上に集まって来ました。イエスの話を聞こうとやって来た人々は、草の上に腰を下ろしたり、岩や早春に咲く花の傍らに立って待っていたりします。皆顔を上げ、主の方を向き、静かに思いを巡らしながら、平和な生活を送るためになすべきことを語られる救い主の言葉に耳を傾けようとしています。

キリストの穏やかな声が響き渡ります。「平和をつくり出す人たちは、さいわいである……。」(マタイ5:9) この言葉で注目すべきことは、「つくり出す」という箇所です。キリストに従い、天の祝福をもたらすためには、この世の中、つまり地域社会や隣近所で、また特に家庭の中で積極的に平和をつくり出さなくてはなりません。

時の中間にあっては、多くの人々がキリストにこう期待しました。すなわち、政治家としてローマの支配者に立ち向かい、抑圧された人々に平和をもたらしてくれると。確かにキリストは平和をもたらしてくださいましたが、キリストが説かれた平和は外面的または政治的なものではなく、むしろ個人の内面的な心の平和でした。

ベトナム戦争中に起きた出来事について述べたいと思います。当時、アメリカ合衆国は気高く正当な理由のゆえに戦争をしていると信じている人もいました。しかし、世論は変わり、ベトナムから手を引くべきだという意見を述べる人も出てきました。

そのとき大管長を務めていたのは、ハロルド・B・リーでした。外国で地区大会に出席していた大管長は、国際ニュース局の記者からインタビューを受けました。ある記者がこう尋ねました。「ベトナム戦争についてあなたの教会はどのような立場を取るのですか。」わなに陥れるような質問とも思われました。答え方によっては、誤解される恐れが多分にあったからです。もし預言者が「わたしたちは戦争に反対です」と答えたら、マスコミはこう言うでしょう。「それは変ですね。あなたがたの教会には『信仰箇条』というものがあり、その中には国家を支持すべきだと書かれています。国家に対して反対の立場を取るとなると、指導者自ら教会の信条に背くこととなりますね。」またもし大管長が「わたしたちは戦

争に賛成です」と答えたら、マスコミはこう言うでしょう。「それは変ですね。教会の指導者が戦争に賛成するなどとは。」いずれにせよ、教会の内外を問わず、人々の間に大きな論争を呼び起こすことになりかねません。

大管長は、大いなる靈感と知恵とをもって、救い主を知る人らしくこう答えました。「世界中のクリスチャンと同じように、わたしたちは戦争を決して好んではいません。しかし、救い主はこう言われました。『わたしにあって平安を得るためである。あなたがたは、この世ではなやみがある。』(ヨハネ16:33)」さらに、リー大管長はこのように説明したのです。「救い主が語られた平和は、国家の間で武力や政府の指導者同士の交渉によって得られる平和ではありません。そうではなく、わたしたちが戒めを守り、打ち砕かれた心と悔いる霊をもってキリストのもとへ来るときに得られる平和なのです。」(Ensign 『エンサイン』1982年11月号, p.70参照)

世界的に有名なアッシジの聖フランチェスコの祈りの一つは、わたしたちが救い主の手にあって、ほかの人に心の平安をもたらすための器となれることを示唆しています。それこそまさに「平和をつくり出す人」の真髄です。

次のような祈りです。

「主よ、わたしをあなたの平和の器にしてください。
憎み合う人々には、愛を、
反目し合う人々には、^{ゆる}赦す心を、
疑いを抱く人々には、信仰を、
失望している人々には、希望を、
^{くらやみ}暗闇にさまよう人々には、光を、
そして、悲しみに沈む人々には、喜びをもたらすために。」

平和をつくり出す人になるためには、何が平和をもたらすかを理解する必要があります。それは御霊であると、パウロは述べています。「御霊の実は、愛、喜び、平和〔である。〕」(ガラテヤ5:22) わたしたちが主に近くあるならば、大いなる平安と慰めに満たされ、御霊の導きに添った生活をするならば、新たな力がわいてきます。たとえ今日の世の中に様々な問題があふれていても、わたしたちが救い主に従うとき、一人一人の心の中に平安が訪れるのです。□



『イエスはすべての者をことごとく癒された』ゲリー・L・カップ画 (Courtesy of Mr. and Mrs. David Larson)
主の言葉を聴くために集まった忠実なニーファイ人たちへの憐れみの心に満たされて、復活された主はこう言われた。「『あなたがたの中に病気の者がいるか。彼らをここに連れて来なさい。』……するとイエスは、御自分のところに連れて来られた者をことごとく癒された。そこで、彼らは皆、……イエスの足もとにひれ伏して、イエスを拝した。」(3ニーファイ17:7, 9-10)



春の花は誕生、生命、復活の伝統的な象徴です。復活祭の時期になると、オランダの末日聖徒の青少年は、チューリップや水仙、クロッカスに取り囲まれます。これらの花々は、救い主イエス・キリストが栄光に満ちた復活をされたことを、すばらしい形でわたしたちに思い起こさせてくれます（「オランダに咲く花」本誌p.34参照）。



ヒンクレー大管長, CBSテレビ番組『60ミニッツ』から取材を受ける

チャーチニュース編集部

昨年の12月18日、一人の百戦錬磨のジャーナリストと教会の大管長がテレビカメラの前で顔を合わせた。そして会見後、双方の口から出たのは、互いへの深い尊敬の念であった。

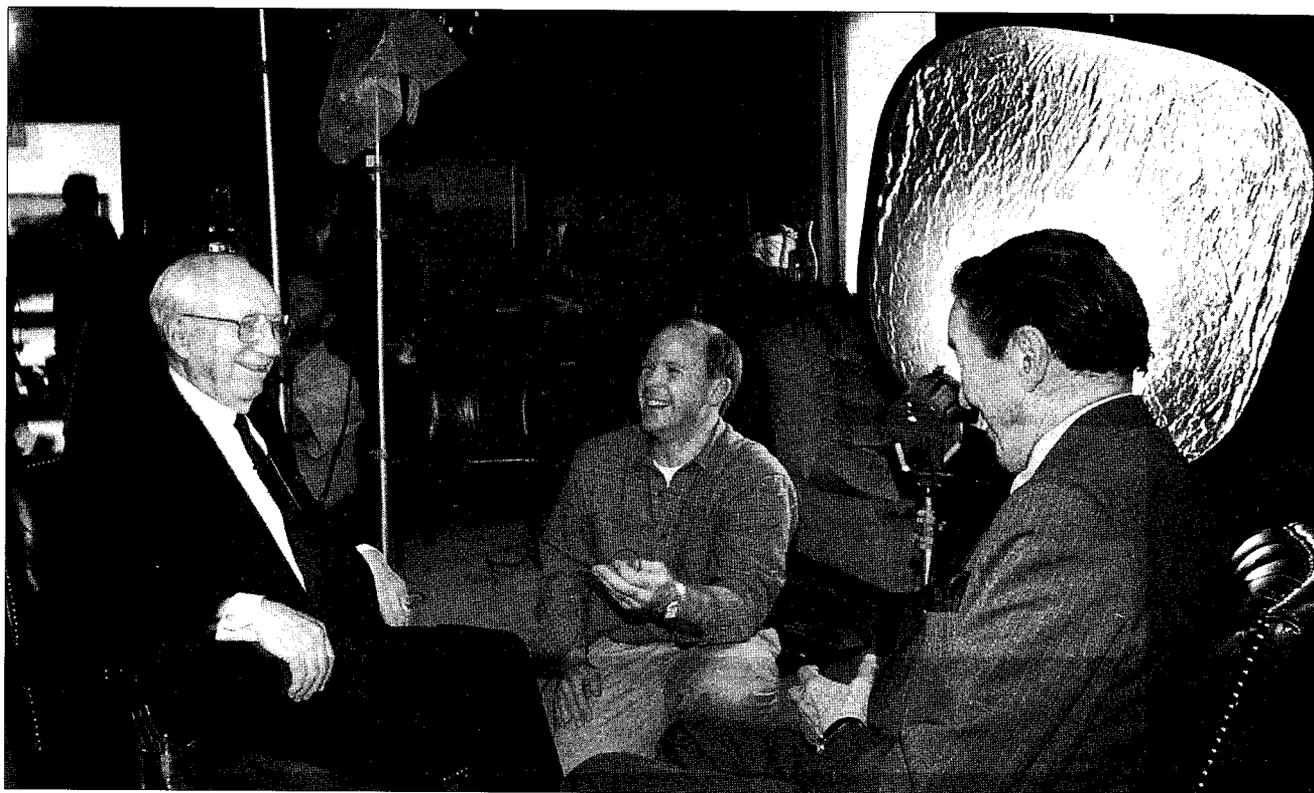
ゴードン・B・ヒンクレー大管長が取材を受けたのは、CBSテレビ番組『60ミニッツ』の歯に衣着せぬ論評で有名なジャーナリスト、マイク・ウォレス氏。取材の内容が放映されると、全米向けテレビのゴールデンアワーのプログラムに教会の大管長が登場する最初のケースとなる。

『60ミニッツ』は人気のある報道番組で、プロデューサーのロバート・G・アンダーソン氏によると、今回取材した内容は2月の同番組で放映の予定とのこと。ヒンクレー大管長とウォレス氏は、昨年11月13日にニューヨークでの昼食会で顔を合わせ、そのときウォレス氏が教会と大管長について取材をしたい旨を伝えたという。

「ええ、彼は辛らつな質問をしましたよ。」ほぼ2時間に及ぶ質疑応答形式の取材を終えたヒンクレー大管長はそう語った。「それは彼の仕事ですし、彼のやり方です。でも、大変有能なレポーターですよ、彼は。」

後にヒンクレー大管長は次のように語った。「今はもうすべて彼らの手の中にあるわけですから、あとは結果を待つだけです。建設的で有益な内容のものになることを希望しています。」

一方ウォレス氏は、最上級の言葉でヒンクレー大管長を表現した。『チャーチニュース』の記者にこう語っている。「(これまでわたしがインタビューしてきた方々と比べて)決して引けを取らない方です。第一級の方ですね。でも信じられないのは、ほかの85歳の方と比較して実にかくしゃくとしておられる点です。わたしの質問に窮したり、嫌な顔をしたりという



ベテランのジャーナリストであるマイク・ウォレス氏のインタビューを受けるゴードン・B・ヒンクレー大管長。CBSの『60ミニッツ』の取材スタッフがその模様を撮影する。

ことは一度もありませんでした。ご自分から進んで話をされましたね。」

ウォレス氏によると番組の内容は教会の素顔を扱ったもので、モルモン教会の大管長が自らの口を通してテレビのゴールデンアワーに自らの教会について語るの、ウォレス氏の知るかぎり初めてのことだという。

ウォレス氏は昨年12月17日にソルトレーク・シティに到着、その晩、テンプルスクウェアのクリスマスのためのライトアップを見学した。インタビューは翌朝9時30分から11時過ぎまで、ヒンクレー大管長の執務室で行われた。その後、テンプルスクウェアに場所を移し、ヒンクレー大管長が神殿やタバナクルなどについて説明する様子が撮影された。

そして午後、ウォレス氏と6人の取材スタッフはユタ州ソルトレーク・シティ伝道部の大会に出席、宣教師へのヒンクレー大管長の説教を聞いた。大会後は、専任宣教師として奉仕する十数人の若い男女を交えてグループインタビューが行われた。

ウォレス氏の非常に率直な態度は、全米で最長寿を誇るこの報道番組の視聴者のよく知るところである。27年間続いているこの番組は、「テレビ史上最も人気が高く、有益な、視聴率の高い番組」と評されてきている。

ウォレス氏は、900万の会員を擁するにもかかわらず「一般のアメリカ人でモルモン教会のことをほんとうに知っている人はあまり多くありません」と言う。番組では教会の素顔が紹介される。

この番組が描く教会の姿は人々の目に触れることになる。しかし、インタビューに同席した人によると、ヒンクレー大管長はよく準備して、人種問題や一夫多妻の問題、財政問題や女性問題などのテーマについての質問によく答えていたという。また、ウォレス氏によると、氏は預言者とイエス・キリストの関係についても大管長に尋ねた



12月18日の90分に及ぶインタビューの後で、テレビジャーナリストのマイク・ウォレス氏にテンプルスクウェアの史跡を説明するゴードン・B・ヒンクレー大管長。

とのことである。

取材が霊的な面に重点が置かれたことは、宣教師大会やその後のグループインタビューによく表れていた。また、デビッド・A・クリステンセン伝道部長が司会をした集会では、宣教師の熱意が輝いていた。取材スタッフはヒンクレー大管長がオーストラリアやブラジル、カナダ、デンマーク、ドミニカ、ドイツ、グアテマラ、ハンガリー、リトアニア、ロシア、スリランカ、トンガ、そしてアメリカ出身の宣教師と握手する姿を撮影した。彼らの多くにとって、ヒンクレー大管長と会うことは一生に一度の機会なのである。

宣教師との集会でヒンクレー大管長は、伝道中に「10の賜物」を得るよう宣教師に勧めた（次頁の記事参照）。

大会の後のグループインタビューでウォレス氏は（このときウォレス氏は宣教師の一人が手渡した『モルモン書』を持っていた）、カリフォルニア

州ウェストミンスター出身のハイディ・テリー姉妹に、なぜ姉妹宣教師の数が少ないのか、また、神権を受けたくないか尋ねた。

彼女は、女性には別の奉仕の機会があることを話し、男性に与えられる神権は人に仕えることを学ぶための奉仕の責任であると説明した。また、女性は生まれつき人に奉仕する性質が強いことも説明した。

スリランカのコロンボ出身のギリソバナ・ラジャラトナム長老は、どのようにしてキリスト教に改宗したかを紹介した。彼は、宣教師として伝道している間、母親に福音を紹介している。

母親はすぐにバプテスマを受けたが、後に自分が経験したことを手紙で知らせてきた。あるとき、急に救急車を呼ばなければならないという気持ちがあったので呼んだところ、直後に心臓発作に襲われた。しかし、あらかじめ救急車を呼んでいたので一命を取り留めた

というのである。

「イエス・キリストの福音は多くの家族に、イエス・キリストのもとに戻り、永遠とともに過ごす方法を教えてくれます。」ラジャラトナム長老はそう語る。

「これ、みんな信じているんですか。」「疑問を持っている人はだれもい

ないの。」ウォレス氏はそう尋ねた。

それに対して一人の宣教師が「わたしたちは真実だと知っています」と言うと、みんなうなずいた (Church News 『チャーチニュース』1995年12月23日付け)。

たまもの

「宣教師は10の賜物を」 預言者、宣教師大会で語る

ジョン・L・ハート
チャーチニュース・スタッフライター

「人々を見だし、人々を教え、人々を励まし、人々の生活を改善するために皆さんがここソルトレーク・シティに集まっておられることは、何と驚くべき、何と意義のあることでしょうか。」ゴードン・B・ヒンクレー大管長は12月18日、ユタ州ソルトレーク・シティ伝道部の宣教師たちにそう語った。

「わたしは世界中の、皆さんと同じようなグループの人々と話してきました。皆さんは同じ姿をしています。きちんとした身なりで、日々磨かれています。愛する同胞の皆さん、皆さんはこの業にあって祝福されています。」

ヒンクレー大管長は、一人一人の宣教師が伝道から持ち帰るべき以下のような10の賜物について話した。

1. 永遠の天の御父とその愛する御子イエス・キリストへの知識と愛。

「伝道地から持ち帰ることのできる何とすばらしい賜物でしょうか。わたしたちの永遠の御父である神とその愛する御子、全人類の贖い主イエス・キリストについての真実で確かな知識、他を圧倒する知識がわたしたちに与えられているのです。」

2. 主の言葉である聖文への知識と

愛。「神の言葉に接し、『聖書』ならびに『聖書』と対になる書物、この『モルモン書』と呼ばれる、主が神の御子であられることを証するもう一つの聖典を研究し、読むことができるのは、何とすばらしいことでしょうか。」

3. 両親へのさらに大きな愛。

皆さん一人一人がご両親をもっと愛するようになるのではないのでしょうか。」

4. 伝道地の人々への愛。

ヒンクレー大管長は、62年前のイギリスでの伝道の経験をこう語った。「そのすばらしい民への大いなる愛と尊敬の念がわいてきました。」

5. 勤勉の大切さ。

「皆さんは今ここで働くよりもっと勤勉に働いたことはなかったと思います。……この世の中で人に違いをもたらすのは労働です。皆さんが身に付けられる最もすばらしいことの一つは、懸命に、しかも系統立てて、効率的に働くことです。」

6. 聖霊の靈感への確信。

「この確信はふさわしい生活をする人にもたらされます。わたしたちはある程度このことについて知っています。でも、説明するのは難しいです。今日ここには『60ミニッツ』の取材スタッフの方がいらっしやいます。この方々はわたしに(啓示の霊についての)興味深い質問を幾つかなさいました。……説明できるかどうか分かりません。難しいで

す。でも、真実です。わたしは真実であることを知っています。皆さんも真実であることを知っています。それにふさわしい生活をするよう心がけましょう。」

7. チームワークの大切さへの理解。

「皆さん一人一人には同僚がいます。背が高くてがりがりにやせていて見栄えのしない人かもしれませんが、あなたの同僚です。同僚のいい点、人格的に優れた点を見つけて自分の生活に取り入れるよう提案します。」

8. 清さの価値。

「清さに代わるものはありません。……思いを清く保ってください。皆さんの周りにあふれている世の汚れから離れ、高く、まっすぐに、誠実に生活してください。そうすれば、もっと優れた人物になることができます。」

9. 行動する信仰。

「伝道に行くとき、父はわたしにこう言いました。『一つ忠告しておこう。』父はマルコによる福音書を開けて、一つの短い聖句を教えてくださいました。『恐れることはない。ただ信じなさい。』(マルコ5:36)」

10. 祈る謙遜さ。

「ひざまずいて、人が人に語るように主に語りかけてください。諸天の下に、熱心な祈りに代わるものはありません。」

ヒンクレー大管長は次の言葉で話を結んだ。「わたしたちは皆さんのために祈っています。それを知っていただきたいと思います。わたしたちは皆さんがわたしたちのために祈ってくださっていることを知っています。それは大きな意味があります。ありがとうございました。わたしたちは皆さんを大いに頼りにしています。皆さんはその狭い肩に、教会を代表するという重荷を負っています。皆さんと会う見知らぬ人々にとって、皆さんは末日聖徒イエス・キリスト教会なのです。頭を上げて、ほほえみをもって御業に前進してください。」(Church News 『チャーチニュース』1995年12月23日付け)

集会所を大切にする

ソルトレーク・シティー発

教会は1991年以来、集会所の清掃と維持を教会員が自らの大切な責任として行うように求めてきました。『聖徒の道』では、この問題の現状について教会総合施設部実務部長のテッド・D・シモンズ兄弟にお話を伺いました。

問い：まず、この計画の目的をもう一度説明してください。

答え：今までは管理人がすべての集会所に一人ずつ置かれて、何でもしていました。清掃やいす並べ、鍵の開け閉めなどです。これが今はパートタイムの清掃担当者が割り当てられて、基本的な清掃作業だけをするになっています。このようにして、教会の資源をもっと有効に使うとしているのです。

しかし、管理人の責任が変わっただけでなく、教会員の責任も変わりました。フルタイムの管理人がすべての集会所にいるわけではありませんから、集会所の清掃や維持について、教会員がもっと活発に参加しなければならないのです。教会員の援助により、集会所の清掃と維持の費用を大幅に削減できました。わたしたちは今もなお集会所を建て続けていますが、以前よりかなり低い経費で清掃と維持ができるようになりました。1年間に削減した経費は、新しい集会所を数か所建設できるほどのものです。教会員の援助は実に大きな力です。この計画が主からの霊感を受けたものであることは疑う余地がありません。

問い：教会員の責任にはどのようなものがありますか。

答え：まず教会員の方々には、救い主への愛と敬虔、尊敬の気持ちからこの計画に参加してほしいと思います。集会所は主のもので、そして、わたしたちは集会所で主を礼拝します。ですから、いつも主にふさわしい集会所

にしたいのです。また、手入れをしていると、集会所への愛着がわいてきます。昔は、教会員が新しい集会所の建設に実際に携わっていました。その後、建築資金を個別に納めるようになりました。そして今、教会員は集会所の手入れをすることによって主に犠牲と奉仕をささげるのです。

日曜日は、集会后にごみを拾い、いすやテーブルを元に戻し、必要であれば洗面所の紙を補充し、集会所の整理整頓を行ってください。週日は、活動が終わったら床を掃除し、カーペットに掃除機をかけ、ごみを持ち帰ってください。ほかに教会員の責任となったものは、毎日の鍵の開け閉め、バプテスマフォントの水の管理、聖餐テーブルの清掃、音響ならびに映像装置の設置、照明ならびに備品のスイッチを切ること、使用後の台所の清掃、花壇の植え付けと手入れ、付属図書館そのほ

かの備品の清掃と手入れ、教会員の技術でできる範囲の小さな修理、集会所内外の特別清掃プロジェクトへの参加などが挙げられます。

これらの責任を果たす教会員のために、掃除機やモップ、ほうき、ごみ袋、洗剤、洗面所の紙などを納めた物置があって、いつでも使えるようになっています。

ごみを拾うことやいすを片付けることは何でもないことのように思えますが、これらを教会員が協力して行くと、ワードは何時間もの労働時間を削減することができるのです。それにワードの数を掛けてみてください。すごい時間数になるでしょう。第一、集会所は本来は汚さないで使わなければならない場所であり、もし汚してしまったら自分できれいにすべき場所であるはずですが、それなのに人にお金を払ってきれいにしてもらおうというのは、おかしな話です。要は、予防のための維持管理プログラムは教会員の参加があって初めて効果が現れるのです。

問い：そうしたことのいい例があればご紹介ください。

答え：ワードや支部の教会員は、集会所を一緒にきれいにすることで親しくなります。毎年清掃プロジェクトを行っているワードがあります。ワード



テッド・D・シモンズ兄弟

教会員には、自分たちの集う建物の清掃と維持に責任がある。

の朝食会などの楽しい伝統行事と組み合わせられているのです。年に2回の土曜日をステーキ清掃の日として、各ワードの教会員が集会所内外の清掃と維持を行っているステーキもあります。あるステーキでは、管理人が長期療養をしなければならなかったときに教会員が集会所の清掃作業を行いました。また、近所で盗みが多発していたあるワードでは、教会員が夜、交替で集会所の見張りをしました。

もちろん、このプログラムが始まる前から、たくさんの教会員の方々が清掃に協力して下さっていました。でも、今お願いしているのは全教会員に参加してもらうことなのです。

問い：地元の指導者も効果的に参加していますか。

答え：わたしたちが世界各地の集会所で目にしてきたことによれば、地元の指導者が集会所の維持について主に進んで敬虔さ^{けいけん}を示せば、その模範によって教会員全体が良い影響を受けるようです。それに、指導者が建物のことを気にしていると、予防による維持管理のことが折に触れて集会で採り上げられるようになります。大切なのは、維持の必要性に教会員が気づくことです。ほとんどの人は進んで助けたいと思っています。でも、一人の教会員にあまりにも大きな負担がかからないように、指導者の方で情報を提供し、励ましを与え、組織化する必要があるのです。

神殿のようにきれいな集会所だったらどんなにいいでしょうね。確かにわたしたちはそのレベルまで到達することができます。一人一人の教会員が自分のすべきことを行えば、小さなことから大きなことが起きます。今度礼拝堂の中にごみが落ちているのを見たら、立ち止まって拾っていただければと思います。あなたのその行動が主に仕えることになるのです。□

『モルモン書』を配布する

名古屋地区および名古屋伝道部広報ディレクター
石川賢一

昨年の秋に『モルモン書』の改訂新版が発行されて以来、『モルモン書』で地を洪水のように満たす」ために名古屋地区で行っている二つの活動を紹介します。

名古屋市立図書館へ 15冊寄贈

名古地区の6つの県（愛知・岐阜・三重・福井・石川・富山）には全部で262の公立図書館があります。各館に1冊ずつ寄贈したいと計画していますが、その皮切りに、昨年10月22日、名古屋市立図書館15館に『モルモン書』を寄贈しました。贈呈式は、市立鶴舞中央図書館の応接室で行われ、名古屋西ステーキの伊藤博康会長と名古屋伝道部のJ・リード・マックレー部長から同図書館の瀬尾奉仕課長にお渡ししました。

過去の指導者や宣教師の努力によって、名古屋市立図書館の幾つかには、すでに旧版の『モルモン経』が備えてありました。そのため瀬尾さんは、「青い表紙のモルモンの本」をよく御存じでした。これらは改訂新版と取り換えられます。

同図書館には、一昨年は英文の『モルモニズム百科事典』（全4巻）を、今年はビデオ『ケント・デリカットの

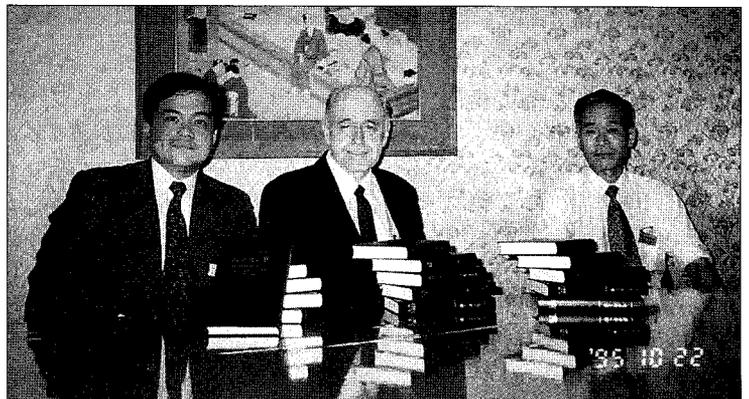
レッツ・ファミリング』15本をも寄贈しています。名古屋市民220万人のうちの幾人かに、わたしたちの教会を知っていただく機会を差し上げたいと願っています。

金沢市内のホテルに 70冊寄贈

石川地方部金沢支部は、日本三名園の一つで有名な兼六園のすぐ近くにあります。北陸地方で最も有名な観光地ですから、教会堂の周囲にはホテルがたくさん建っています。過去の指導者や宣教師の努力によって、金沢市内には、客室に旧版の『モルモン経』を備えてあるホテルが幾つかあります。アメリカ人宣教師がホテルで働く人に英語を教え、それが縁で『モルモン経』を寄贈したこともありました。

石川地方部は、これらのホテルの『モルモン経』を新版の『モルモン書』と順次取り換えていくことを計画しています。まず、12月17日に教会堂の隣に建つホテル、ニューグランド・イン金沢に70冊を寄贈しました。地方部大会

名古屋市立図書館に『モルモン書』を寄贈。左から名古屋西ステーキの伊藤博康会長、J・リード・マックレー部長、名古屋市立鶴舞中央図書館の瀬尾奉仕課長。



の日であったため、伝道部長会、徳沢清地方部長、西村勇三支部長、専任宣教師たちがそろって支配人にお渡ししました。

旅のつれづれに偶然に手にした『モルモン書』によって、人生が変わる、そんな奇跡が起きることを期待しています。(いしかわ・けんいち 名古屋ステーキ春日井支部)



金沢市内のホテルに『モルモン書』を寄贈する名古屋伝道部の宣教師たち。

LDSキャンポリーで富士登山

—スカウト仙台第45団からのレポート—

末日聖徒イエス・キリスト教会(LDS)が育成団体であるスカウトの団が、御殿場「国立中央青年の家」キャンプサイトに集い、末日聖徒イエス・キリスト教会キャンポリーが昨年8月3日から6日までの3泊4日のスケジュールで開催されました。

キャンポリーには日本全国から11箇団、スカウト120人(シニア奉仕隊を含む)、指導者50人が参加しました。真夏の暑さから離れて涼風の吹く場所で、天候にも恵まれ、そのテーマである「未来に備えて頂上を目指そう」を富士登山によって達成し、終了しました。

仙台第45団もスカウト12人、指導者5人が参加し、一人一人が感動とすばらしい体験を得て無事に帰ってくる事ができました。仙台第45団にとって最もすばらしい成果は、最優秀班として表彰されたことです。このキャンポリーは生涯忘れられない思い出として一人一人の心に残ることでしょ。

日本一高い山を 登り切った感動

—途中で癒しの祝福—

仙台ステーキ泉ワード
日出英輔(高校1年)

昨年8月3—6日に行われた「LDSキャンポリー」では、非常に多くのことを体験しました。竹材による野外工作、手旗信号などのスカウト技能を使ったプログラムといろいろありますが、何といてもいちばんビッグな体験は、富士登山でした。

はっきり言ってしまうと、このため

だけにキャンプに来たようなものでした。とても楽しみだっただけに、まったく不安はありませんでした。それと

同時に、富士山もそこら辺の山も、大して変わらないだろうと思っていました。

そして、いよいよ出発の夜が来ました。登り始めの2,30分はまったく余裕で、みんなでワイワイ話しながら登っていました。このときは、まだまだ先が長いことに気がついていませんでした。6合目を過ぎた辺りになると、さすがにみんな疲れてきたらしく、話し声もほとんどなくなり、息を吐く「ハッ、ハッ」という音だけが聞こえる、とても静かな登山になってきました。

ちなみにスタートは5合目です。その後、ある程度順調に進みましたが、途中でぼくらの隊から、二人のスカウトが体調が悪くなって歩けなくなってしまいました。無理は禁物だったので、この二人と付き添いの指導者二人は、ゆっくり来ることになりました。

4人を欠きながらも、7合目を越え、日が登り始めたころ、ついに8合目に着き

中列右2人目が日出兄弟



ました。このとき見た^{ごらいこう}御来光は、ほんとうに美しく、地球の「美」を見たようでした。

朝食を取り、しばらく休んでから、最後の難関であり、最大の難関である山頂までの残りの道、通称「胸突き八丁」と言われる所を登り始めました。何回も何回も休憩を取りながら、何とか9合目を越し、頂上までもう少しとなったところで、ぼくは強烈な歯痛に襲われました。

いくら冷やしても一向に治まらないため、ほかの登山者の方から薬をもらったのですが、なかなか痛みは引きませんでした。このままリタイヤしたいと思っていたとき、「癒^{いよ}しの祝福をしてあげるから、おいで」と呼ばれました。ぼくは不安でした。これでも駄目だったらどうしよう、そんなことばかり考えていました。

「治りますか」と聞くと、「あなたの信仰次第です」という返事でした。「必ず治る」それを信じて儀式を受けました。すると、うそのように痛みが引いていきました。ほんとうに不思議でした。その後は多少ペースダウンしたものの、スムーズに進み、ついに山頂に着きました。

日本一高い山を登り切ったのです。このときの感動は、言葉ではとても言い表せないものでした。

たっぷり休憩を取った後、登山したら必ずしなければならぬ下山をしました。足はもうふらふらだったのですが、無事キャンプ場に到着しました。ほっとした途端、強い気持ちが込み上げてきました。同じスカウトの仲間、指導者、そして天のお父様とイエス・キリスト様への感謝の気持ちでした。

ところで、6合目付近でぼくらと別行動になってしまった4人ですが、8合目まで登ったとのことでした。4人全員がかわいそうでした。もう一度登らせてあげたいというのが、いちばんの願いでした。

付けていたゼッケンを外し、ついに長い長い登山が終わりました。この活動を通して、肉体的には非常に疲れましたが、霊的にはとても高められました。(ひので・えいすけ)

不登校、無気力の青少年を 援護して

自ら不登校の体験を持つ奈良地方部飛鳥支部の^{あすか}小川隆司兄弟は、宣教師との出会いや柔道、ボランティア活動などを通して自立できた体験から、自営する建築業の傍ら、同様の悩みを抱えている人々にカウンセリングや様々な活動を通して自立への援助を行っている。

神戸伝道部奈良地方部飛鳥支部
小川隆司

わ たし^{あすか}の一日はパソコン通信から始まります。全国の不登校で悩んでいる子供たちや親御さん、やる気の出せない青少年からの相談を受けてカウンセリングしているのです。

不登校であった中学時代

わたしは中学生のころ、いじめがきっかけで学校を休みがち(いわゆる不登校)になりました。家に閉じこもり、何もしないのに心の中は嵐のような毎日でした。その中で宣教師との出会いがわたしを救ってくれたのです。

15歳のときのこと、きっかけは友人でした。「英会話に行かないか」「アパートに来ないか」などと誘われて、

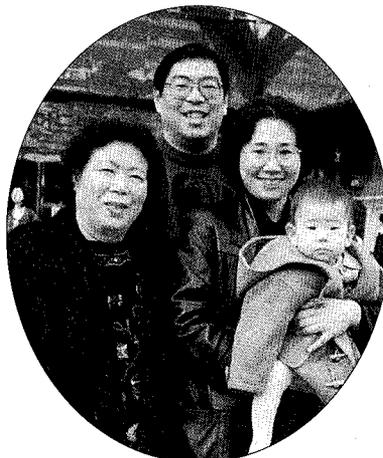
ついて行くうちに心が安らぐのを感じるのでした。それまでのわたしは、家の中においても「学校に行かなければ」「何かをしなければ」と思っているのに、外に出ようと決心しても、近所の人の目や後ろめたさのようなものを感じ、心がすっかり擦り減っていました。それが、教会や宣教師のアパートの中では不思議と落ち着くのでした。心が真っ白になる体験、すがすがしさ、今思えば主の御霊に満たされていたのでしよう。

教会に行くには朝から家を出なければなりません。いつの間にか、周囲の目も気にならなくなっていました。「自分は自分だ」と思うことができたのです。教会での活動やレッスンがわたしの心を支えてくれました。また祈りによって心が癒されるのもしました。そしてその年の初冬、パプテスマを受けることにしたのです。

また柔道とボランティア活動によって自信ができ、体も心も鍛えられ、自立することができたと思います。わたしにとっては、教会も含めてこれらはとても重要な救いの場所でした。

自立への援助

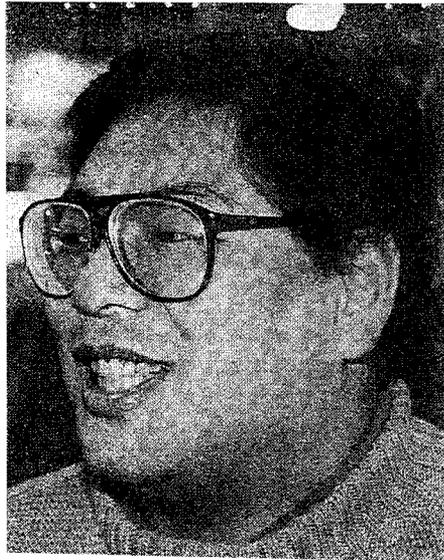
しかし、今現在苦しんでおられる子供さんや親御さんの中には、わたしが経験したような救いの場所は少なく、どうしてよいか分からない状態の方も多いでしょう。そんな方々とわたしの経験を分かち合ったり、一緒に活動し



小川ご家族

『奈良新聞』

1993年12月4日付け



青少年とともに社会参加の道を探る
小川 隆司さん

「子供たちの個性を存分に生かして、本当に自分がかしこいで、実現の補助ができれば」。この願望から不登校の子供たちや、やる気の出せない青年たちに勉強や社会生活を共にす

るべく、自らも自立への道を探る『アトロ学園』を設立した。小川さん自身中学、高校なり、共に仕事を通じて自分がかしこいで、実現の補助ができれば。この願望から不登校の子供たちや、やる気の出せない青年たちに勉強や社会生活を共にするべく、自らも自立への道を探る『アトロ学園』を設立した。

自立への道を援護

「子供たちは最初心を閉ざしてしまいがちですが、手を離さないで、自分を出さない子供や、やる気が出ない青年たち、私自身が経験したことをアトロ学園に伝えてほしい。ぜひ相談に来てほしい」。『アトロ学園』の発展に胸膨らませる。

おがわ・たかし 昭和四十年三月六日生まれ。高田市内で便利屋「何出物屋手屋」(なんでもいっしょ)を十八歳の時に設立。小川商社代表。柔道・鍼灸館理事。平成五年から『アトロ学園』設立に奔走。

たりできる場所を作りたいと思ったのです。わたしは自営業を営む傍ら「不登校の子供」の面倒をみたり、「やる気の出せない青少年」を預かってともに生活し、一緒に働いたりしていました。

また心身障害者(情緒障害)の青年とも一緒に仕事をしました。その中でM君との出会いがありました。彼は両親の離婚、親友の裏切りなどがあって中学2年

のころから心を閉ざしていました。わたしが彼の母親と親しかったので彼とのつきあいが始まったのですが、中学に通うのも自宅からでは甘えが出るので、わたしの家から登校することにしました。

ある日のことです。彼は朝からあまり元気がなく、しぶしぶ学校に向かったのですが、わたしは直感で彼が自宅に戻っているように思ったのです。駅の自転車置き場にも彼の自転車はありませんでした。そこでわたしは仕事へ行く前に、彼の家の近所を通ると、彼はちょうど自転車を置いて田んぼの中を逃げていました。

中学卒業後は通信制の高校に進み、うちで働くようになったのですが、あるとき増改築の仕事がありました。と

ても古い田舎の農家なので牛の肥だめがあり、そこに長年たまった泥や水をかき出さなくてはなりません。一輪車に積んで急な坂道を運ぶのですが、彼は慣れないために何度も一輪車を倒し、肥まみれになりました。文句を言いながらもその仕事を一人でやり通したことは、彼にとってはいい経験になったと思います。「嫌なことでも、たとえ何度失敗しても、最後までやり抜く」ことを体で実感したようでした。

彼は後述のH君のときも力になってくれました。M君は現在トラックの運転手をしています。高校もあと一年で卒業するところまできています。「将来オーストラリアで暮らしたいねん」と、この間言っていました。普段はほとんど連絡がないのに寂しくなると

いに来て、困ったことがあると「小川さん、あのね……」と一番に相談しに来ます。「父親みたいに頼りにしているみたいやね」と妻は言っています。

無気力であったH君

H君との出会いは、わたしの友人である漢方薬局のご主人の紹介でした。高校を1年でやめてブラブラしていた彼は、無気力で約束が守れず、喜びや感じたことを素直に表現できない子でした。初対面のとき、髪を赤く染めて後ろでくくり、前髪が長くて目がどこにあるのか分からなかったのを思い出します。

数日後、彼が仕事に来ると約束したので家でずっと待っていたのですが、2時間を過ぎても現れませんでした。

わたしの名によって 父に求めるものは

約束しても破ってしまう彼の行動パターンを変えさせたいと思いました。約束は守るものだと思いたくて彼を迎えに行き、身の回り品を準備させてわたしの家に住み込みで働いてもらうことにしました。

初めは夜型の彼の生活ペースで始めました。無理はいけないと思ったのです。朝、普通に起きられるようになるまでに3か月かかりました。もともと素直な彼は少しずつ心を開いてくれ、仕事も覚えていきました。職人と組んで現場に行けるぐらいに成長し、よく留守を任せたりしました。一緒に暮らすうちに、極度の偏食もかなり直りました。

彼を預かって1年ほどたったころ、「やめたい」と言うので、卒業試験を受けてもらいました。1か月間自宅通勤させたところ、彼は1時間半かけて電車を3回乗りかえて、無遅刻で毎日きちんとやって来ました。今彼は、朝6時に起きて某会社で神戸の現場を任されています。

主がわたしたちを導いてくださったように、彼が良い方向に変わると信じて彼に接しました。そしてこの主の方法が正しいものであると自らの経験を通して証^{あかし}できます。

わたしの好きな聖句の一つである「わたしは行って、主が命じられたことを行います。主が命じられることには、それを成し遂げられるように主によって道が備えられており、それだけでなく、主は何の命令も人の子らに下されないことを承知しているからです」(1ニーフай3:7)との聖句が真実であることをここに証します。

また、彼らの成長を援護する度に、わたし自身が教えられ、成長させていただく機会となりました。これからも祈りを通して、また聖文を研究し、主から力を頂きながら頑張ります。(おがわ・たかし)



名古屋ステーキ
刈谷ワード
西藪広幸

「すみません。ちょっと2、3分よろしいですか」と、アメリカ人の宣教師に駅前で声をかけられたのは、高校1年生のときでした。いつも優しく明るい彼らに会うのが毎回楽しみで、話はバプテスマへと進んでいきました。未成年でしたので、両親の許可が必要だと知ったときに、大きな不安に襲われました。確かに自分自身いい人間ではないし、このままでは、神様のところで住める自信はありませんでした。ですからバプテスマは、ほんとうに必要なと思ったのですが、宗教は求めています。入会することで戒めを守らなければならず、束縛されるのが嫌でした。たとえ教会に入るにしても、両親は許してくれないと思いました。

主の御霊^{みたま}は火のごとく燃えて

いろいろ迷った末、断ろうと決めて、誘われていたバプテスマ会を最後の見納めにするつもりでした。しかしそのバプテスマ会は、霊的な集会で、わたしはどんどん引き込まれていきました。心は勢いよく燃え上がり、みんなで歌った「主のみたまは火のごとく燃え」(『賛美歌』3番)をわたしも大きな声で歌い、賛美していました。「ぼくもあの白い服を着てバプテスマを受けたい、親の反対があるのでいつになるかは分からないけれど、宣教師の教えてくれた信仰を持ち続けるなら必ずバプ

テスマを受けられる」と、わたしの気持ちが大きく変わったことを宣教師に話し、バプテスマへと話を進めていくことにしました。最大の難関である両親の許可を得るため、母親とわたしと宣教師で話をすることにしました。しかし母親は、わたしがまだ高校生であって、一つの宗教に入って考えを固めてしまうのはいけないし、何よりも父親が決して許してくれないだろうと言いました。

母の死を境に

間もなく母が病気になり、入院しました。母が入院中も、わたしが知らないうちに宣教師や支部長さんが見舞いに来てくれていたようです。手術の経過も良く、大したこともないだろうと思っていたのですが、実は末期癌^{がん}だったのです。あと1、2か月の命と言われました。父とけんかをしたときにそれを知らされました。その事実をなかなか言い出せなかった父もほんとうにつらかったと思います。でも母は分かっていたようです。

それから1か月もしないうちに母は亡くなりました。まだ38歳でした。わたしは頭の中が真っ白になり、ようやく状況が飲み込めたとき、悲しみに胸が引き裂かれ、涙があふれました。こんなに早く母親を亡くしてしまった悲しみと、いつも反発して何一つ息子らしいことをしてあげられなかった自分が情けなく、ただただ泣くだけでした。お通夜とお葬式には、たくさんの方々が参列してくださり、母の人柄の良さがにじみ出ていました。その中でも支部長さんをはじめ教会の方々、宣教師たちも参列してくださいました。

当時セミナーを受けていましたので、セミナーの教師の姉妹とセミナ

リーの仲間が、お通夜るとき、家の外で雨に打たれて泣き崩れているわたしに傘を差してくれて、一緒に泣きながら「西藪君、頑張ってバプテスマを受けて、神殿でお母さんの身代わりの儀式をしよう」と言ってくれました。わたしは、必ずバプテスマを受けて神殿で儀式をして、自分が子供を持つようになったときに自分の母親のすばらしさを伝えようと心に強く誓いました。

父親への説得

わたしの決心は固まっていたのですが、父親の許しが必要でした。それでもなかなか言い出す勇気がなく、タイミングをみて父親に話そうとしていました。一度勇気を出して話をしてみたものの「宗教は怖いものなんやぞ。そんなん入らんでええ」と言われるだけで、なかなか心を開いてはくれませんでした。それから何度か支部長と宣教師が家に来てくださったのですが、父親は会おうともしてくれず困っていましたが、あるとき、「今度は、ちゃんと会ってくれなくては困る」と頼んだところ、家に来てくれた支部長さんと会ってくれて30分ほど話をしました。それから、すんなりバプテスマを許可してくれました。自分でも信じられないくらいでした。

晴れて1989年9月17日に三重地方部四日市支部でバプテスマを受けることができました。そのころ教会の中に友達もできていたので彼らも出席し、わたしのバプテスマを祝福してくれました。今でも鮮明に覚えています。あの日わたしは、この「細くて狭い道」に入り（1ニーファイ8：20）、しっかりと鉄の棒を握り締め、強く進んで行こうと決意しました。

伝道に出る決意

バプテスマを受け、教会員としての生活を順風満帆に進んでいました。よく日曜の集会の後、宣教師と一緒に伝道していました。その度に「西藪兄弟

はいい宣教師になれるよ」と言われました。確かに宣教師と働くことは楽しかったのですが、わたしは2年間、専任宣教師として伝道に出る気はありませんでした。なぜなら、わたしはそのころ、高校を卒業してからプロボクサーになりたいという夢があり、いちばん油の乗り切っている時期に、2年間空けるのは難しい話でした。

そのことで数日随分悩みましたが、ある安息日の聖餐会で、どんよりした雲が一気に晴れ、光が振り注ぐようにすっきりし、「伝道に出なきゃいけない」というより、「伝道に出たい、自分もそんな経験をしてみたい」そう強く思いました。教会外の人からは分かってもらえず、父親もどちらかと言うと反対でした。それでも自分のやりたいことをはっきり伝えました。そしていつもこう思っていました。「この10代の純粋さを保ち続け、信仰をもって頑張ればきっと夢はかなうさ。」

大管長のサインに 宣教師の召しを実感

そして1992年の12月に伝道の申請を出し、次の年の1月半ばころに伝道の召しが来ました。エズラ・タフト・ベンソン大管長のサインを見たとき、「ぼくにも召しが来たんだ。主の預言者から。」すごい実感がわきました。

3月5日にJMTC（日本人宣教師訓連センター）に入り、東京北伝道部に召されました。たとえ福音に反対する声があっても、いつも、わたしたちの伝えていることは真実なんだと信じていましたし、知っていました。そして『モルモン書』がこの末日に生きているわたしたちに与えられた聖典であること、人間は何であり、神様の前でのどのような存在なのか少しづつ分かってきたような気がします。また、好きではなかった家族のことも、しみじみ思うようになりました。

伝道中、JMTCを含め14人の同僚を神様から頂いて一人一人から様々なことを学びました。そのほかにもわたしを支え導いてくださった伝道部長や会員の方々、思い出す度に胸がいっぱいになります。

95年2月にわたしの伝道は終わりました。これからも、夢を持って生きていくつもりです。いつもこの聖句を胸に。「だからあなたがたは、わたしの名によって常に父に祈らなければならない。与えられると信じて、わたしの名によって父に求めるものは、正当であれば、見よ、何でもあなたがたに与えられる。」（3ニーファイ18：19-20）（にしやぶ・ひろゆき ステーク宣教師）

教会から遠ざかった10年の間に

一夫の改宗を得て一

東京北ステーク中野ワード
落合里子

失望や落胆のときに

失望や落胆が重なり、祈ることさえ苦痛に感じられる日々があり、その訓練をうまく乗り越えることができなかつたことがきっかけだったような気がします。落胆や失望のときほどサタンが容易に付け入るときはなく、「悪

わたしは10数年の間、教会から遠ざかり、福音に従っていただければ得られる平安や祝福を受けることなく過ごしていました。

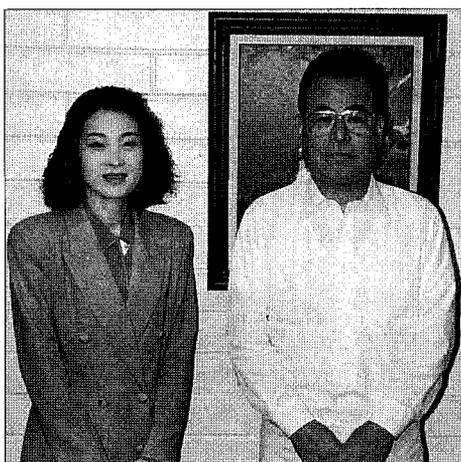
霊は祈るようには人に教えず、かえって祈ってはならないと人に教える。」(2ニーファイ32：8)サタンの策略にまさにはまってしまっていたのでしょう。この試練のときこそ、ありったけの力を振り絞って神に祈り、力を求めたなら、その試練をも乗り越え、さらに証を強くすることができたのですが、自分の悲しみにとらわれすぎて、大切なことを見失っていたように思います。

福音を知ってから得た証の光は小さく弱くなってしまっていたものの、まったく消えうせてしまったわけではなく、もう一度福音の光を受けたいと、力と導きを求め続けた日々でした。しかし、長い不従順な生活を変えることは容易ではなく、すべての戒めを守るために仕事が変わるという決断ができません。生活を変えようと幾度か試みてもは様々な不安に打ち勝つことができず、挫折してしまいました。そのうちに不安に打ち勝つ力が欲しいと心から願うようになりました。それが心の叫びとなり、再び祈ることができるようになりました。

霊界に行った両親のために

福音に従順になりたいと思い始めたのには、ほかにも理由がありました。一つは両親のことです。両親はすでに何年か前に霊界に行っていますが、両親のことについて考える度に自分が何もしてあげられなかったこと、両親に感謝していると伝えられなかったことを悔いる思いが強くなりました。霊界に行ってしまった両親のためにできることは身代わりのバプテスマを受けられるようにしてあげることしかないという気持ちから日ごとに焦りがわいてきて、そのためには、まず自分が教会に行けるようになることが第一歩だという思いを固めました。

もう一つの理由は、わたしの家に時折来てくれるほかの教会の方と玄関先で何度か話す機会を持ったことでした。



落合ご夫妻

わたしが、神とキリストを信じ今教会に行っていないが教会員であること、『聖書』のほかに『モルモン書』も聖典としていることを話すと、その方たちは『聖書』のあちらこちらから聖句を引用しながら懸命に自分たちの信じることを伝えようとしていました。その方たちの話を聞いた後、見送りながら、わたしは、完全な真理のある教会を知っていながらそれをどこかの片隅に追いやって、大切な明かりとなるものを使わず、取り出そうともしなかった自分に気づきました。そして、しまい込んでしまった大切なものをもう一度輝かせたいと思うようになりました。

飢えていた心に聖典の言葉は深くしみわたりました。毎日読むことができなくても読むときはこの中から自分に必要な力となるものを得たいと心から願う思いで読みました。読んでいると、その言葉に心から従いたいと思うようになりました。そんなとき、第三ニーファイ第13章を読んでいると、目の前を覆っていた幕が取り除かれたような気持ちになりました。

「まず神の王国と神の義を」

「まず神の王国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて添えて与えられるであろう。

だから、明日のことを思い煩ってはならない。明日のことは明日自身が思い煩うであろう。その日はその日の苦勞だけで十分である。」(3ニーファイ13：33-34)

何度も目にしてきたこの聖句が、このときはまるで呼びかけるようにわたしの心に深く響きました。この聖句に従おうと決心し、ためらうことはありませんでした。まず第一に安息日を守り、聖餐が受けられる道を選ぼうとする力がわいてきました。安息日を守ると決心できたときから心の中を重く覆っていた雲が切れ、光がさし込むように温かい平安と喜びがやって来ました。そのときの晴れやかな気持ちは忘れることができません。

神様があらゆる方法でこたえてくださったことを感じます。両親への思い、ほかの教会の方を通じて大切なことに目覚めさせてくださったこと、聖典の言葉が力となるようにしてくださったこと、それらはすべて神様が備えてくださったことがわかります。不従順なわたしであっても、求め祈るとき、天父が深い愛で導いてくださったことに感謝する思いでいっぱいです。

変わるのはまず自分

教会に行つて聖餐を受けることができるようになりましたが、まだわたしには大きな試練がありました。教会員ではない主人は、わたしが教会に行くことについて反対はしませんが、宗教にまったく関心がなく、むしろ偏見を持っている人でした。ですから家庭の中で時々起る問題や心の擦れ違いは標準や価値観の違いから来るのだとしかたなく思っていました。

そういう点も問題ではあるのですが、わたしはそのとき、自分の誤った考えに気づきました。同じ方向を向いて同じ目標を持って生活したいという思いが強すぎて、主人に対し、心の中で常にこうあってほしい、こうしてほしいという期待ばかりをし、期待が

外れると、不安や失望を感じていたのです。しかし変わるのは相手ではなく、まず自分であることに気づきました。わたしが福音を実践し、優しさや寛容さ、忍耐、愛を身に付けることができるようになれば、この試練は乗り越えられるという思いがわいてきました。そして、そうあるように努力をしました。

夫の改宗に向けて

ある日、わたしが主人と一緒に教会に行ってほしいと言うと、主人は思いがけず「いいよ、行ってみよう」と言ってくれたのです。この言葉はほんとうにうれしく、さらにわたしを勇気づけました。それから何度か一緒に教会に行き、宣教師から福音を学び始めました。もちろん主人は、その間も心の迷いや不安があり、投げ出しそうなときもありましたが、宣教師の方はわたしが弱気になっていても熱心に積極的に進めてくださったので、主人も毎日少しずつ『モルモン書』を読み、バプテスマを受けることができました。わたしが再び教会へ行けるようになって2か月半ほどたったころのことでした。それはまるで重い荷を積んだ荷車の車輪が1回転し始めるのに大変な力を要するけれど、回り始めると自然に進んでいくように、決心すると同時にすべてのことが回り始めたようです。

わたしにとって10年間は不必要な回り道であり、石ころだらけの上り坂でしたが、神様はその苦難を多くのことを学び、強める機会にしてくださいました。神様の腕はいつもそばにあることを知りました。聖典の言葉が力であることを知りました。天父と主に感謝するとともに、温かく迎えてくださった監督や兄弟姉妹に感謝し、ともに歩めるよう努力してくれた主人に心から感謝しています。(おちあい・さとこ 扶助協会教師)

神殿での礼拝からもたらされる祝福

— 『肉体が燃え尽きるほどに、
わたしを愛で満た』してくださいました。—

福井地方部^{たけふ}武生支部
池田正幸

「主^{きよ}の宮居、聖^{きき}きを主に捧ぐ」
わたしは、神殿参入が大好きです。昨年12月の神殿参入のとき、初めて菊地良彦神殿長にお会いし、帰り際ロビーでお話をする機会に恵まれました。「これからも神殿に度々来るように」と励まされました。そのとき「来月の初めに来ます。そして支部の兄弟姉妹も連れて来ます」と約束しました。

誘い合って神殿へ

福井に帰って早々、支部の兄弟姉妹を翌月の神殿参入へ誘いましたが、正月ということ、なかなか行く人がいませんでした。「正月だし、仕方がないな」と、自分に言い聞かせましたが、ほんとうのところは、神殿長に対して調子の良いことを言ってしまったと、少々後悔しました。

毎日、そのことが気がかりで、心の中で祈りましたが、一向に行く人は現れませんでした。しかし、神殿長との約束を果たすため、わたし一人でも神殿に行こうと決心しました。すると信じられないことに、元日に金沢の兄弟から「池田兄弟、神殿にはいつ行かれますか？」という電話がかかってきました。「今月の4日に行きます」と告げますと、「わたしも一緒に連れて行ってください」と言ってくれました。そして「よければほかの兄弟姉妹も誘ってみましょう」と言われるのです。「ああ、これで神殿長、いや神様との約束が守れる」とうれしくなりました。神様がこんなわたしでも気にかけてくださるといふ感謝の思いで胸がいっぱ

いでした。そしてその月は、5人の兄弟姉妹とともに神殿に参入できました。

この出来事が、わたしの「月に1度は神殿に行く」という目標の始まりでした。その後、わたしも妻も限定の儀式執行者に召されました。そのとき神殿長のお話を聞く機会に恵まれ、中でも印象深かったのは、神殿長がイエス・キリストを証^{あかし}される姿^みでした。御^{たま}霊を感じるままに振る舞われるその姿に、わたしは「真のイエス・キリストの証人」を見た思いがしました。そのとき、神殿長を通じてわたしたちに主の愛が注がれ、胸が熱くなって、こらえ切れずに大声で泣いていました。これもわたしにとって特別な霊的経験となりました。

「ほんとうにあなた様からの ものか証してください」

また別の経験ですが、ある日、支部のある会員について御霊の導きを受けたのです。それは最初、わたしにとってとんでもないことのように感じられたのです。というのは、彼のお父さんは、重い病気で「明日は手術の日」と決まっていたのですが、御霊がわたしに「彼を明日神殿に連れて来るように」と、はっきり言われたのです。数日前に支部の神殿参入があったのですが、彼はお父さんの手術前の準備などで忙しく行くことができませんでした。

わたしはこのような初めての経験に驚き、思い違いをしているのではないかと、何度も何度も考えました。しかし、一向にその思いは心から消えるどころか一段と強くなるばかりでした。挙げ句の果てに、わたしは思わず心の中で神様に「ほんとうにあなた様から



池田ご家族

います。また、兄弟姉妹たちの都合に合わせて一緒に行くようにしようと努力しているときに、主はわたしを助け

てくださいます。そして、家族の大きな助けもあります。

皆さんは笑われるかもしれませんが、一人で車で普通の道を14-16時間かけ

て神殿に行ったことも……それも1週間は何度かありました。運転中は賛美

歌を口ずさみ、神様が今までに自分と

家族に下さった数々の恵みや、学んだ

教訓について思いを巡らせます。その

ときは、感謝の気持ちでいっぱい満

たされ、うれしくて目から涙があふれ

ます。そのため、長い距離も時間もわ

たしには短く感じられます。(ただ、

道中の唯一の心配は途中の給油のとき

にスタンプの人に、涙顔を悟られはし

ないかということだけです。)

金沢での神殿フレイヤサイトの折に、

菊地神殿長は、わたしたちみんなが自

分自身の「聖なる森」、すなわち敬虔

な祈りの時間、聖なる導きを受ける天

父との聖なる交わりのひとときを持つ

ようにと勧められました。この大切な

時間が、わたしにとって「最高の聖な

る森」だと思っています。

わたしは月に最低1、2回は神殿に

行くという目標を立ててから、それを

実行したときには、時間と体力、金銭面

での助けを頂いています。その主から

の助けにより言い尽くせないほどの

数々の祝福と能力を得ることができま

した。(いけた・まさゆき 第一副支

部長)

うとしても、その後が続きませんでした。またしばらく沈黙の状態が続きまし

た。そこでわたしは彼のお父さんの手

術のことを少し聞き、家に帰りました。

帰ってもそのことがずっと気がかりで

した。それから思ってもみなかったこ

とが起こったのです。

「慰め主にやって

声を上げるとき」

手術の次の日の朝、その兄弟から電

話があり、「神殿に行く決心をしまし

た。そこでお願いですが、一緒に行っ

ていただけないでしょうか……」とい

うことでした。わたしは迷うことなく、

「わたしも神殿に行きます。一緒に行

きましょう」と返事をしました。

その日わたしたちは、神殿へ向かい

ました。どのように決心されたのかと

話を聞きますと、わたしが帰ってから

彼は折り紙と断食をされ、神様から助け

を頂いたのだそうです。わたしは「真

の慰めと導き」は神様が御霊を通して

なされることを、このとき学びました。

「あなたがたは慰め主によって声を

上げるとき、わたしがいよと思つたま

に語り、預言するであらう。

見よ、慰め主はすべてのことを知っ

ており、父と子のことを証するからで

ある。」(教義と聖約42:16-17)

彼はそのとき、限定の儀式執行者の

召しをも受けられ(どういふわけか申

し込み用紙がわたしの手もとにあつ

た)、お父さんの分までも祝福を受け

られました。そのおかげで、手術後の

痛みがまったくなく、傷の回復も早

かったそうです。

感謝の気持ちで 胸がいっぱいに満たされ

ものか証をしてください」と祈りま

した。するとどうしよう、神様はず

ぐに「わたしの肉体が燃え尽きるほど

に、わたしを愛で満た」してくださ

ました(2ニー77:14:21)。それ

があまりにも強烈に感じられたので、

思わず泣きながら「分かります。も

うけようです。十分よく分かってま

した」と何度も叫びました。

この出来事を妻に話すと「そんなこ

とは言わない方がよい」と言いました

が、わたしの意志は固く、「今、兄弟

に会いたい」と電話で伝え、すぐ出か

けました。

しかし車で向かう途中、今度はわた

しの心に「今は行かない方がよい」と

いう考えが強くなり、「お

まえは一体何を考えているのだ。彼の

お父さんは明日手術なんだぞ。そんな

ことを言っただけが喜ぶでも思うの

か」といいます。それがまたずつ

と続いたのです。わたしは内心引き返

そうかと何度も思いました。神様がわ

たしに忘れ難い強烈な証を下されたお

かけで、彼の家の玄関をくぐることに

できませんでした。

わたしは彼にそのことを伝えました。

しかし彼はわたしのメッセージに困惑

し、この大きなチャレンジに「できな

い」と、落ち込んでしまいました。

その理由は、彼の両頬は教会に反対で、

手術の日に神殿に行くことなど考えら

れなかつたからなのです。そのときは、

わたしに対して不信の念を持たれたと

思います。

わたしは彼を心から愛していました

ので、心からの慰めを与えたいと思

いました。しかし、どうしても言葉が出

て来なくて、しばらく沈黙が続きまし

た。そしてわたしの口から出た唯一の

言葉は、「イエス様は、あなたとあな

たのお父さんを心から愛しておられま

す」といふことだけでした。後を続け

新聞からの話題

●『読売新聞』に掲載された東京南伝道部の専任宣教師マッケイ・クリステンセン長老（『聖徒の道』では、1995年10月号ローカル8頁に掲載している。）

『読売新聞』1996年2月10日付け



「いっかZOOMと対決したい」と話すクリステンセンさん（遊び相手の西児重郎氏）

① 米大リーグの野球チームと一位指名で契約した左打者、マッケイ・クリステンセン選手（三）が、いま東京でキリスト教の布教活動をしている。信仰を優先させた結果、一度も練習に参加しないまま二年前に来日し、野球と無縁の宣教師生活を送ってきた。だが、現在も身分ははっきりとしたプロ選手。六月には帰国して野球に復帰するが、「ZOOM（野茂英雄投手）」と同じ新人王になりたい」と夢は膨らんでいる。

ホワイトソックス クリステンセン選手 20

大リーグ1位指名 東京で宣教師活動

クリステンセンさんは、身長一材八〇、体重八十ポンド、カリフォルニア州フレズノ郊外のクロービス西高校で一番打者の外野手として活躍し、三年の時は、打率五割で、ホームラン六本、通算の盗塁王も獲得した。雑誌の全米高校野球チームのメンバーや同州の年間最

伝道条件に契約

優秀野球選手にも選ばれ、たほか、高校スポーツ界のスターとして、フットボールでもランニングバックとして全米チーム入りしている。このドラフトの前には、優秀野球選手にも選ばれたほか、高校スポーツ界のスターとして、フットボールでもランニングバックとして全米チーム入りしている。そして卒業目前の九四年六月のドラフトで、同州のアメリカン・リーグ球団、カリフォルニア・エンゼルスが奨学生として声をか

クリステンセンさん一家は、ユタ州に本部がある末日聖徒イエス・キリスト教会（モルモン教）の信者。同宗派では熱心な信者は若いころに宣教師活動を行うこととされ、クリステンセンさんの兄（ニ）や姉（三）も布教に出ている。

プロ野球のスカウトは毎試合、二十人以上が押し掛けたそんな騒ぎの中でクリステンセンさんは全部で二十八の大リーグ球団に手紙を書いた。△ドラフトの意向はあ

「毎日が充実」—6月に復帰後は「新人王めざす」

クリステンセンさん一家は、ユタ州に本部がある末日聖徒イエス・キリスト教会（モルモン教）の信者。同宗派では熱心な信者は若いころに宣教師活動を行うこととされ、クリステンセンさんの兄（ニ）や姉（三）も布教に出ている。

が、プロ野球のスカウトは毎試合、二十人以上が押し掛けたそんな騒ぎの中でクリステンセンさんは全部で二十八の大リーグ球団に手紙を書いた。△ドラフトの意向はあ



野球ファンのために米国で作られたクリステンセンさんのルーキーカード

JMTC

2月に召された専任宣教師

第197期生 7人



前列左から1-7

〈名前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 柴田 勇人	名古屋S/名東南W	沖縄伝道部
2. 那須 紅子	神戸M/福知山D/相生B	岡山伝道部
3. 伊志嶺 宗子	沖縄那覇S/宮古B	名古屋伝道部
4. 久保田 薫	東京北M/長野D/松本B	神戸伝道部
5. 松川 あずさ	神戸S/明石W	仙台伝道部
6. 武田 静	仙台M/秋田D/秋田B	福岡伝道部
7. 服部 卓	大阪堺S/羽曳野W	名古屋伝道部

S：ステーキ，M：伝道部，D：地方部，W：ワード，B：支部

役員の変動

1996年1月13日から1996年2月9日まで管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の変動（敬称略）

- 札幌西ステーキ琴似ワード
新監督：守田雅光
- 町田ステーキ湘南ワード
新監督：大西 誠
- 福岡ステーキ北九州ワード
新監督：土田善樹

新設地方部の紹介

- 神戸伝道部御坊地方部（福知山地方部から分割）。管轄ユニット——御坊支部，洲本支部，田辺支部
新地方部長：中沢 悟

新設ユニットの紹介

- 神戸伝道部福知山地方部篠山支部（舞鶴支部と西脇支部より分割）
新支部長：吉田一樹
- 沖縄那覇ステーキ石川支部（沖縄ワードより分割）
新支部長：伊波 貴

皆さんの原稿を
募集しています

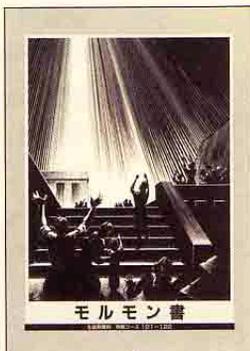
◎ご投稿の際には連絡先（住所，電話番号），教会での責任（役職名），所属ユニット名を記入し，写真を同封のうえお送りください。原稿は一部手直しさせていただくことがあります。また，掲載までに時間がかかる場合もありますので，ご了承ください。

◎お願い——海外に召される日本人宣教師たちを紹介いたします。伝道の召しを受け取り次第，編集室に写真を添えてお知らせください。（氏名〔フリガナ〕，伝道部名，召された月を明記）

◎あて先：☎106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会 『聖徒の道』編集室

☎03(3440)2666 FAX 03(3440)3275

新刊紹介



『モルモン書』インスティテュート生徒用資料（改訂版）

32506 300 A4変 212頁 500円

『モルモン書』の理解を深めるために重要な聖句や理解しにくい聖句に関する注解，歴史的背景を示す資料，おもな登場人物の紹介，年表などの資料を提供している。従来の生徒用資料から抜粋し，新資料を加えて再編集された。

ステーキ/伝道部/地方部/ワード/支部一覧

<p>〈札幌ステーキ〉 旭川第一W, 旭川第二W, 厚別W, 札幌東W, 白石W, 豊平W, 岩見沢B, 江別B, 士別B, 滝川B, 千歳恵庭B, 稚内B</p> <p>〈札幌西ステーキ〉 小樽W, 琴似W, 新琴似W, 手稲第一W, 室蘭W, 藻岩W, 函館W, 浦河B, 篠路B, 手稲第二B, 苫小牧B</p> <p>〈釧路地方部〉 網走B, 帯広B, 北見B, 釧路B, 根室B</p>	<p>日本札幌 伝道部 担当地区</p>
<p>〈仙台ステーキ〉 青葉W, 泉W, 上杉W, 長町W, 福島W, 山形W, 石巻B, 塩釜B, 古川B, 米沢B</p> <p>〈青森地方部〉 青森B, 大館B, 八戸B, 弘前B, 三沢B</p> <p>〈秋田地方部〉 秋田B, 酒田B, 鶴岡B, 横手B</p> <p>〈盛岡地方部〉 一関B, 北上B, 宮古B, 盛岡B</p> <p>〈郡山地方部〉 会津若松B, いわきB, 郡山B</p>	<p>日本仙台 伝道部 担当地区</p>
<p>〈高崎ステーキ〉 桐生W, 熊谷W, 高崎W, 高崎東W, 前橋W</p> <p>〈東京北ステーキ〉 浦和W, 川越W, 越谷W, 豊島W, 中野W, 坂戸B</p> <p>〈東京東ステーキ〉 鎌ヶ谷W, 小岩W, 千葉W, 長生W, 八千代W, 市原B</p> <p>〈我孫子ステーキ〉 牛久W, 北千住W, つくばW, 松戸W, 水戸W, 我孫子B, 日立B</p> <p>〈宇都宮地方部〉 宇都宮B, 古河B, 小山B, 那須B</p> <p>〈新潟地方部〉 三条B, 長岡B, 新潟B</p> <p>〈長野地方部〉 諏訪B, 長野B, 松本B</p>	<p>日本東京北 伝道部 担当地区</p>
<p>〈東京ステーキ〉 吉祥寺W, 所沢W, ひばりヶ丘W, 三鷹W</p> <p>〈東京南ステーキ〉 渋谷W, 洗足池W, 東京第一EW, 東京第二EW, 東京第三EW,</p> <p>〈東京西ステーキ〉 国立W, 甲府W, 多摩W, 八王子第一W, 八王子第二W, 府中W</p> <p>〈町田ステーキ〉 厚木W, 湘南W, 藤沢W, 町田第一W, 町田第二W</p> <p>〈横浜ステーキ〉 大船W, 上大岡W, 川崎W, 横浜第一W, 横浜第二W, 横浜中央W, 小杉B, 横須賀B</p> <p>〈静岡ステーキ〉 静岡W, 清水W, 浜松W, 富士W, 沼津B, 袋井B, 焼津B</p>	<p>日本東京南 伝道部 担当地区</p>
<p>〈名古屋ステーキ〉 岡崎W, 刈谷W, 豊橋W, 名東北W, 名東南W, 春日井B, 瀬戸B, 豊田B, 中津川B, 野並B</p> <p>〈名古屋西ステーキ〉 一宮W, 岐阜W, 御器所W, 高畑W, 福徳W, 犬山B, 大垣B</p> <p>〈石川地方部〉 金沢B, 小松B, 七尾B, 野々市B</p> <p>〈福井地方部〉 武生B, 敦賀B, 福井第一B</p> <p>〈富山地方部〉 魚津B, 吳羽B, 高岡B, 高山B, 富山B</p> <p>〈三重地方部〉 伊勢B, 鈴鹿B, 津B, 松阪B, 四日市B</p>	<p>日本名古屋 伝道部 担当地区</p>
<p>〈大阪ステーキ〉 阿倍野W, 大阪W, 東大阪W, 枚方W, 関目B</p> <p>〈大阪堺ステーキ〉 河内長野W, 堺W, 羽曳野W, 三国ヶ丘W, 和歌山W, 岩出B, 泉南B, 泉北B, 橋本B</p> <p>〈大阪北ステーキ〉 川西第一W, 川西第二W, 千里中央W, 豊中第一W, 豊中第二B, 豊中第三W, 箕面W</p> <p>〈大阪東ステーキ〉 茨木第一W, 茨木第二W, 吹田W, 高槻第一W, 高槻第二W</p> <p>〈神戸ステーキ〉 明石W, 尼崎W, 加古川W, 神戸W, 西宮W, 姫路W, 北六甲B, 三木B</p> <p>〈京都ステーキ〉 大津W, 下鴨W, 城陽W, 西京極W, 彦根W, 伏見W</p> <p>〈奈良地方部〉 飛鳥B, 名張B, 奈良B, 大和郡山B</p> <p>〈福知山地方部〉 相生B, 篠山B, 豊岡B, 西脇B, 舞鶴B</p> <p>〈御坊地方部〉 御坊B, 洲本B, 田辺B</p> <p>〈神戸伝道部直轄支部〉 関西EB,</p>	<p>日本神戸 伝道部 担当地区</p>
<p>〈岡山ステーキ〉 岡山W, 岡山西W, 倉敷W, 松江W, 米子W, 出雲B, 尾道B, 倉吉B, 津山B, 鳥取B, 福山B</p> <p>〈広島ステーキ〉 高須W, 徳山W, 廿日市W, 広島光W, 岩国B, 呉B, 浜田B, 安古市B, 柳井B</p> <p>〈高松地方部〉 坂出B, 高松B, 徳島B, 丸亀B</p> <p>〈松山地方部〉 今治B, 宇和島B, 高知B, 南国B, 新居浜B, 松山B, 八幡浜B</p> <p>〈山口地方部〉 宇部B, 下関B, 防府B, 山口B</p>	<p>日本岡山 伝道部 担当地区</p>
<p>〈福岡ステーキ〉 井尻W, 北九州W, 福岡W, 藤崎W, 飯塚B, 久留米B, 佐賀B, 中津B, 二日市B, 前原B, 八幡B</p> <p>〈鹿児島地方部〉 鹿児島B, 川内B, 谷山B, 名瀬B, 都城B, 宮崎B</p> <p>〈熊本地方部〉 諫早B, 大分B, 大牟田B, 熊本B, 熊本北B, 佐世保B, 白川B, 長崎B, 長嶺B, 延岡B, 八代B</p>	<p>日本福岡 伝道部 担当地区</p>
<p>〈沖縄那覇ステーキ〉 石川B, 沖縄W, 小禄W, 首里W, 那覇W, 那覇東W, 普天間W, 糸満B, 浦添B, 嘉手納B, 名護B, 石垣B, 宮古B</p>	<p>日本沖縄 伝道部 担当地区</p>
<p>〈アジア北地域伝道部直轄支部〉 マガダンEB, ウラジオストクB (ロシア)</p> <p>〈本州軍人地方部〉 岩国MB, 佐世保MB, 座間MB, 三沢MB, 横須賀MB, 横田MB</p> <p>〈沖縄軍人地方部〉 沖縄MB, ハンセンMB, 普天間MB</p>	<p>アジア北地域 伝道部 担当地区</p>

(Wはワード, Bは支部, MBは米軍人支部の略。EWは英語ワード, EBは英語支部の略)

(1996年3月5日現在)